うつほ物語

九三、九四

は
15
17

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17

ガラス使用

宇津保物語

國讓上の二 止
正本 中巻
廿三
今板本十八の巻二
古本十九の巻

は
30
17

貴
東京圖書館
和書門
和文 類
別 乙ぬ 函
一の二 架
~~二~~ 号
三〇 冊

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17
ガラス使用

○源氏のけれこ
ろこりのかるのと
のもとに…もまくも
あふ人

くして門ゆるしくきつきくらきをしあつりぬ。ぬし
のふねのもとくさつり給くゝいふそうしきこえし給ふし
う。いつくゝいのくりのし給しあうり。の給をせてなる
ほするゐ河気神そうしや文よおりしきし内よりも
えふすちう給のでゝ紙をしきゝかえひらくしゃうりれめうり
なゝしまそうえあ里いふられりゝ里一ゐぬまえちかくも
きうへしひうは母しいふとうしうしをとすくまきひよおりしまさき
ひるるととやうくしを給ひ人ゝりましきこえんしさせ
給ふさらく給ひ世てうあるみえしけるやうてとく
しき御ゝきこえさせ給とをすいふくらのにそうふ女
とうけさせなりてしれとそゝへしまれゆのめやう

東京図書館

故榊原芳野納本

くにゆつり中の上

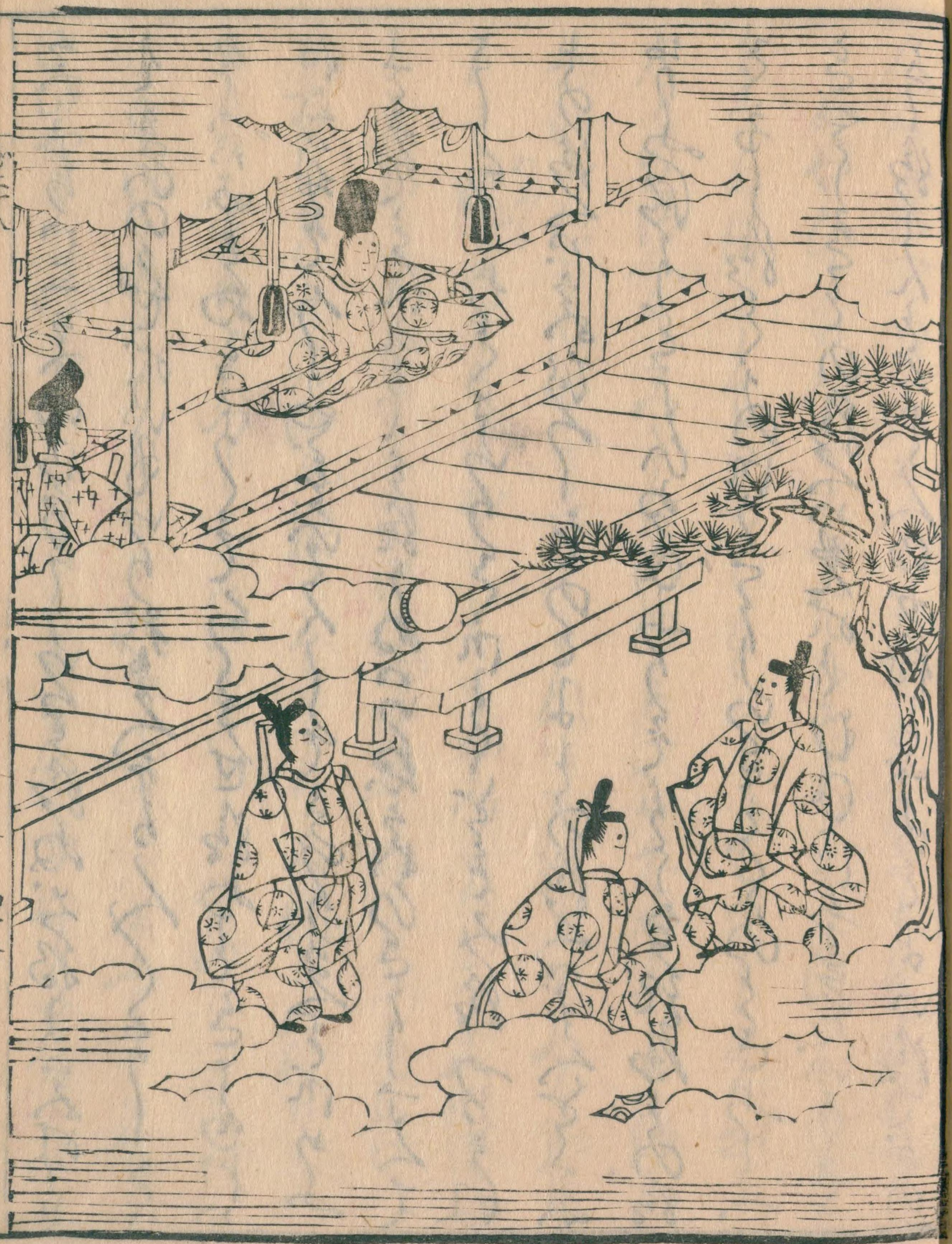
九七

廿三

[illegible]書

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17

ガラス使用



ふたところよりこそせ給ふすむとさらくしもせつらく
てたの大将兼雅君らく人のかねこや。おとれ
しくうるていさり給へり。宮しらせ給へそらは
さくの御所よりかくひやうてうらんとの給く
物しきせ宮のうちられと申しましくほうと
はそうゐこれにしもあるまじく人てさうそくし給
つりさまくちけしくしちいらすもとしそてゆろれつゝ
れめちとらく人のお侍ゆうりとし志夜も
よろこらや。宮母らかやしのりきやとくゆらん
もと。くまゐるねれそ。みな入給ぬ

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17
ガラス使用

あはうり 居眠こ
スゐとにとあり。語
の助あるゝゝる字
あて句眠こいゝをゐ女
いよゝみのまゝく

あいあいエ

ゑかゝれは二文のはかりを給ぬ。大殿はゑかはふへまうのかせぬいもつりねなき人かゝ人くゐしくそふいのは物さうてゝくさせ給めとさゝこそはれいおなおそうしやうはんしてさうりまへてれめふしまそこれまこしと給ひぬいはおもゑひさうしすへてまうしらめさくさうりそくれゝくときみ給かうられとの給へは文はうつもの上まとの給へはしへそふ物りのほりにしゐはるよりそよまするれ居との給くゐしめ給のはうくりうさきひとゝさゝ人とやさましとの給へは見給ともひかしゆまにいうらくとて給ひんとぞさくゝ人の少将をすのもよは給てうの

ここらまてくかも
汗あれはてにい
えい源氏に汗あえ
てまゝみえ文いえれ
れい寒慄のをなり

人のんて給つらいはの物とかくてゝさうりそ給わのりいとおやひとりのねるとりやてゆえとろうさゝれいその人にとよまりほうしそいおしらをせくまそいへとさなかく人はよの給へそ文まうられめとさめて物さきおた給ね給への上はともひへそてゝなれねもほしそあるもかしうそ暁まなりとかしもふるつさんすこ一文なれはさはさうれるこゝといやろされひやくふるゝくうり。あゝられろ所ちうくてはぬれ九條しそくうりゝ大将とかおりゑしうみてそまつくそいゝうくりとおひて一文かゝくよくれとのこゝうめしくれ。おやふこゝとなをまよそくはりやうふれうことよるもののそあるはゝほぬとおかして。

やつられこの氣八氣
子の氣今併すし七い
れことくそう合氣あり

ふくいあよのあわ
まくりしらちさね
のゝくらち ぬるとそ

男君たちハらからのことゞもし給ふ女君ハれいの帳のうちに
ゐてハらからうをて、まうちぎみおほん給ふ。
いさゝかなる御そむとおもりして、入給へるをいとまうさん
まてきつり給ふ。よろこびわかれぬやうにめでたくなりて、れく
しらのうへをおもとのこゝろにあなかしこあれとかへらら
うら川にまかりとまる。ひめ君もおはす河の里
給へるとこれハきゝたちさふらひけらいりてあへく
やまとよりくるこそは、はやめ給へるみことかしられと。
みくるま給ぬ。かくてその日のゆふかたまうて給ぬ。おかと
こ君たちハおほしのうへくのれもまゐれくれとかへ
給。女君たちよつかねのやまとのまへにふまうる

ひつしく祓ハ上中下の
祓あるの八三代格に
ふ詳なるうそへり又
いか茂川ハ上中下祓
のさしめあれいそれ
いつれのこととするや
ゐらん

ひんりのハ東河ハ
加茂川と西川とゝる
桂川ゆまあてつく云り

をうらにまかりとも入て、一宮ハよりも〳〵めでたりて、大宮たち
にのおほいまうちぎみの御はしまでなり給ふめれと給ら
まへにさふらひとくかひつゝあやふさとこそたち中
なりうへそのかみあとりいてたる給りて給へ。おれ
とゝ君下にかゝく大将より御車なるをいふゝ
つまして、をさゝせなり給ふのいかゝの君あそこをいは給
て、たゝかひつかに給て、よう給くまゝかり
おとゝ中君たちうちのいよ車こそかゝして給。
おとゝハいと給ひたひものゝさへくしてい給。
あかくこのうちの給これみたりて河の中へ入ての河
女給みたりハのとゝ川よりあけらいおつりよ車こそ

させたく。おほすとふつきたまへるに。物せさせ給へ。おや
しうちれこれやうら。人も君にまゐりたらん
なれはいからしくあんとそ。いふしそ給へくうり
給ぬ。三条殿にて殿つかさとうしきかれはへん
し給ひむとく。大殿をかへるともに思ひてられけれと
をの人く物やらは。御車のまつらほとちかきおなを
さのれは車を見とつまとの給へは。殿つかはしくゆつ
との給ほとそ。此車ともにゐめりもまつてそ。
かうちうらふ。物とくな給ひをとうなせとこ。殿
へかのれは車を一よろくさせなへはされ。くいと衣よ
物し給ひくうくされよおりつゝかりしてれつくへいら給

結番

しうし給ひくうり給ぬ。大殿をとゝり給ひにかくてよは
例ならん心ちもひてうむしうちのとれ井し給ひくそ
御給ひかしこれ善言まうくゝ給へくおふ
とゝれは衣よひくうおしけ。あるはめくみえ
し給ひつゝひうおくくひくれはまゝのれつくひ
のくらへたもやゝすつかのあんえてりいお
給へうさせよかちゝもとうくかか
のかゝ給。すゝはこたくせ給ひれはきるはねを
よそれあさひのし給ひれとき西れはあか時はひく
らくちかさくもうりとゝの給。あいのかれはさそ給は
をそられたみか人のまと。あかこゝやしやゝこるさ

まゐりもしつゝ給ふれど、くはなつくれあまりとそ
しるとゆを、殿ゐる大殿の御ことゝふとゞ、殿つかの
れ方よりも、めでたくつくらせ給ひて、人々殿上人ゝら
いさゝかなるをも人々わからぬみなのいのちにかへて、お
へくさゝりこそ、かゝりやきの御心ばへなりてお
りさすしまへて、くさつり給まくれば、かゝりしるさげく
ことくなかりくに山にて寺しけるを、わかれかなる御殿給
ありけるより給わりて、七月の中の十日よかりぬべ
るゆゑに、尊勝のゑめしのあいよまつり給ひけれ
物ゝうりなとして給ひて、物し給ひとよ。しかると
ことこそあれ、されとも物さゝつし物し給ひれいく

物くるしくなりゆきうる給ふなりし。心地もえやくくき
らるんともしとも、河原といふ所とよくしつゝよるむれ
つく人河と物いとし金くてそいふもつきくと給
まふわれくめもさむくさわり、されともみなしそ中か
しよ御まにこれなきくれを、また御まきのしのくて給
ひいなふの心のなくしうかわくとつくおほのりもく
て、おりしきれ、とこそは、文これあきとし給はさいはく
おもうにりして給へれいそくてやは忘れてしまへ
くて、あまよた物きくあめりとも、心の文角ゆあやりま
はゝしたりくての給ふをみてくりしこそりも物せさうと
いふ人給まゐる、御心のつくなむしよれき、さむれなる

くて、こゝのころもせかへわりける給ひけりのや
うみもせもわたく、そのひてしる絵かいし給ふな
むすめの給へば、おやしきのひとこともさらくき上む
人りやいうくこそらへ給ひてよ左大弁の君いてとこと
くしいてやうのまへいとおもかうくやこのうかりし
君いおもいのうろそとくことくさうし給ひかくて新
中納言殿つかわし給ひすて、さくて返りは君し
ともそせかくそのより君し給てはされし
く君し給ふ、それくやうせいれむ人つまゆうてん
とさむ、ありてとうくおんなれと、見しる給不より君
れさくしるとせしゑいさかへこゝろ二条殿つまみ人おか

思ふるをて給ふよそられおかりてこゝろくし御こしよ
しらにいるてむかしかせしこゝろくまへは中納言殿よ
うらてうりもきこし君殿をむしかよむかしの給ふし人
さ、いてくいとあはこえ給へえ、いとおかしく給へれと、ほと
とゆくてさ、君をれいまゆすかしくそしくたうな
む時なせとつ来かくさらて給ふく、まつ給はせ参りまいりて、
のく御車にて、おはしまして、おりつるもよつかれ
仏の前にわかみてみ給ふく、ゆうろさらく此院にて
お紙しするしそそのうち寄に入給ふく、おなかみくもかし
ことをもくさくされおかれ給ひなるしうらは御前
く、おほ紙らくよいくうらふくさこつる人もあひと、こと

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17
ガラス使用

え給へとつみくえつ給はす。藤つほはすゑくせきえ。とんなしふかれたちしにし奈良よりしもつとのくところて給くれけらくきこしそ給へはいかぶしかりつり給くいてさすめやつふこころ人はあやくのくるまちはさえたる帳にて人あり。たうし殿のりとよろしき女のいとこそいとすれかくけり。中納言めてあやしくも山けれしとついなのしくはまあすくてをお給つりみなこれを藏つれのあねなれとりくしまれうちそみくける。宮の君いとようきさくをきまし。ゆうかやりけれてしそれ母やのれけりなるなんとゆけりけりてゆらゆらく見え給をとのみのありけりしそこらく

さしあけてくお給つり。中納言はうちのきりくてあおき給つれてお給つり。女君いくらやしみと給へともちかされて帳との給をしはお君ちく見えたてしいき給ひおほいつとう給くしくもありてえ心むしき給いくいつみくるとおれ給を藏給はいとをしたる給をゆとかりつくしをやしくさきさて給へは中納言はいとおをゆうけて帳よりの給ひ藏人つこそれ君をいと激ましくらくなりの給はくつきてそのまてりつ給りのみちをまいらうくおつしよせつつなるをいまりくておもちさ世よ人のなかくめちてまりてちえそのまひくいたのいしく。れかとしむらくぞなりくくてくちれはてく

見給をまり給ふ。ひとはもくおもりなむとす。たにまかりけるとせ給ふとも、やうき殿人しけえ給へく。さしのやまさらさせ給へとおほせ給ふ。御なくなくなき給ひて御し給へとて、なくなく給ふ。とろみまかりつれどまれこれりこそ、いとの給ひせくはるな給ひしのくくあつかりて、なくさ隠ごえみえはめのとまへなるをみ給ひても、中納言いみしくなるさ給ふ。さうくともあやしうんみなとはゆくてこころうれとも給ひつ。殿りやことよくおはしまし、志賀しそ。めのとやのごとなりくのはかなしの事なくてくちつれ給ひしらと。御子は女たうくしくくおはしまさんはなれりのへしらんても御し給ふにはさねやうくしかくとく、いとらうくのまふをとりなすふ人しり給ねいかさしをまれあら。ゑなかりしさやうふをつくしてつうく世中をなかりをるすれみしこうれく、うく思ひやうしおもし里給そ。この君をはれうしろをみくしくろりのるすさやうよなとかりして御し給ふしさてし給て。いとをものんくあくよいへさせ給ふくとの給をせなてしたとゆくうらおはしましつるかいいつくさをそさつるね里。御さつれとのまへいかなるなはれしとひとしるいはやうしの御いとこよりしのみして御さうの隠はうさうつ人々うちそ思ひうきとおもふのはめれとなりとるなりけれ

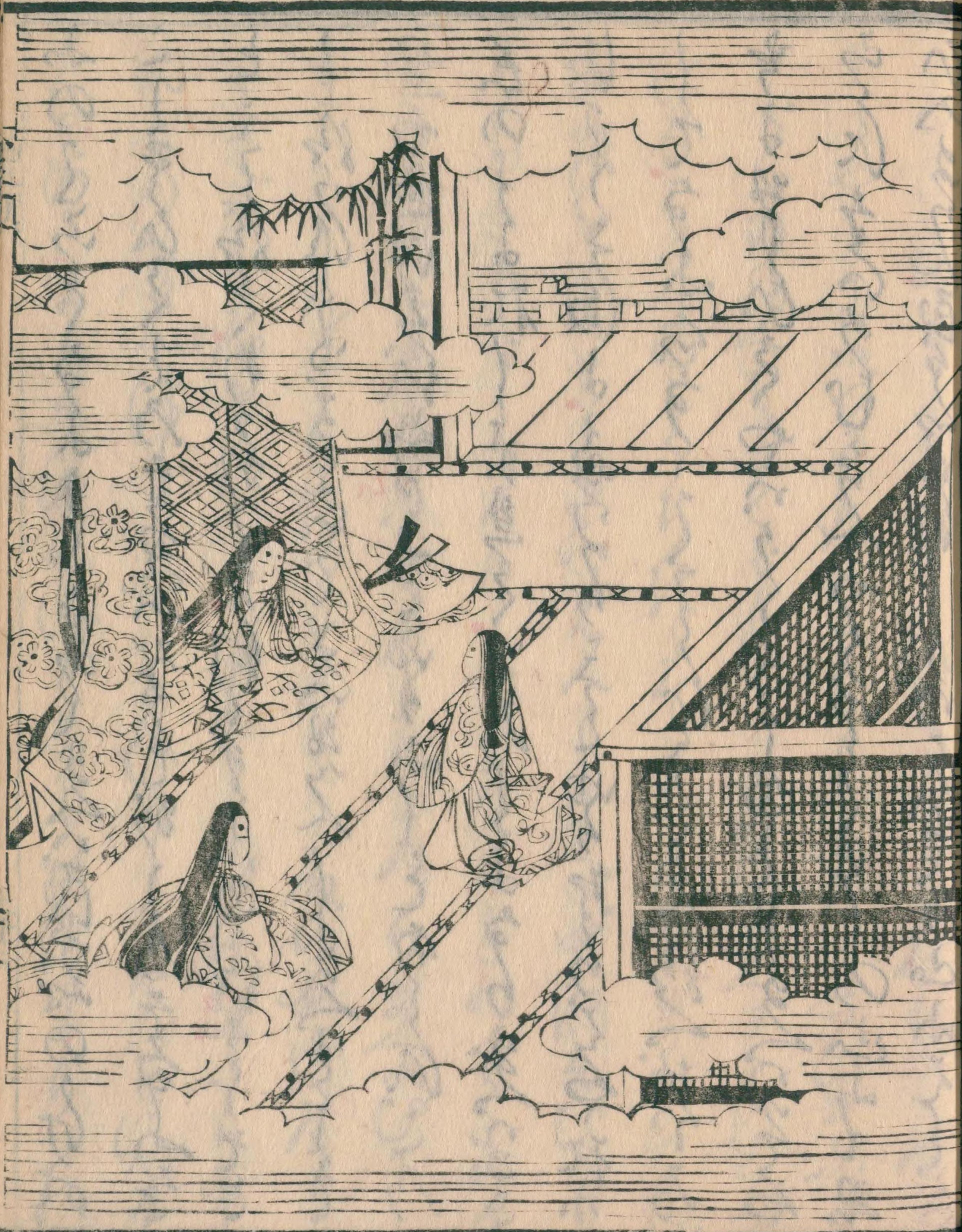
反故
和名抄ノ斉春秋云沈麟士字雲禎少清貧以反古写書数千巻

とゞろきしくゝしてあぢきなくいすかしく人はゆきと
れはなからて、まかくとめてくいへ、かへらてこ
らねまおろかくて抱きつゝれまきあそはして、
山さかしきところ給しつゝひおそれしかれ
くとよばくすさよりてせ給くはとおもほしやると
申せあへし。ぶるて給くいれあてさつら給ひら
しりぞくつゝひ給してうどいそぎめくまのく
し給ほうられとくつたらうしし給りめなうしし給
なくしておほさひしゆくれ。おやこれてくゞめのき
よくかう。おゆさそつられて、かれ物多く。名門
らいへをくれてり。中納言なる氏きげくれなとあり

新宰相
さねよりの名之

く。ゆやもなくて。ぞまれそのめのとまうらし
人のこむすめしを。ぞうすてくとしよろをつかよ。
くまゐりもうしなかくをけらるゝみ給。なまさ
うとむうしえ給人くのまうりてはれそとりの
せはしうらいなてまつる。かくおほしのたまひなから国
まつはむことめてうちとゝろしく人あらよつて
らそてよの人も掬し給つく。あくこの君のみすとい
そこさ給。新宰相もいそぎまうり給てさねまうい
よのかく出給くの。しなかおほかたしこ事をかひ
給へ。おなけさつれはよきふなすむその人をよきされて。
られしうむ給へはすなくて御給ひし。よくへきこえれ

かしこけれとこれは申とも、おやこともとつゝまうしむしく〱、帝所あるたに御し給ひしつこさつくゝゆゑり給へて、二ところ給へしいふとしめ君みもおとゝのおもて給ひしへかくおるとうらふもとえみもなやみしてらくすくいてよなりぬとこそはいふとも、院はみつくをもしと思すやあしくよの給ひたの御かしくいみしう悦おほしたることこむしつゝとも、うちあひてさらに仰せらるといひしかいつや前なんと、おほりわんへ、中納言その人々まいりつかうるをとんなかりとや、おほり月をらんとおほしてこはつくりまそ、ゆゑさらつくにあるそこりてさら給て、ゐあ君はきこえて給ひ、いとめづらしく、そのかんしくうしうかんくにまうりてかとおのかくしとはいひおかしくうりけは衣よおほしてしかはまかやうふとおもひてうすひ、とりしきういそてひ、院さくしめをと衣よりく御しみけまいはされともなくおほして、とおもりよいはおもひいそてまんりけてゐんおほしくきこえて給ひ、め君とゆゝくを御方の給ひてく。さしほくしまゐ給ふはなす銭とあるはきつゝむ物しけりをこそせ給へることの給ふはとしておもひしくされしそのみおほして給ひつるを、うらうしてしひめむ給ひけしされは、義の心地してありし、御のえまへ



は世中にはえひそしうましくこん池のをしうはかりし
ゆとすまじなんとて山ざとに年比は民をめつれ
さよは物し給ふしてころのこさふし人をたのまる
しくはかりめしはこひつくいそこいとはびな
こゝとしろうえるしこえまくはりみちこひを
てをしぬ人のめをしけるはやうてうりしなるむ
そこに殿うくま給しむと入ば心の思のく給ふり
むさかりとなりてさえよるすれてかまとせん人なん
とめわくの世物うくうし給ふくどうて思ひは心うと
うき捨さん人も噯しまてまうてこミてまう入は無悪候くふかお
あそこは地下する所にもまうりて給へとなうてまかりは

ふのうこハぐすまゐしこゝろしまへハ民部卿のみやけむ
こと思ひくとのきこえをともかうのきこえを
とこう給へおぼかれきこれしかハの御こゝろそこ
し給はんとものまうでくるハあはれんしまへとも
ハえう連語をあたゞこゆうかみしともかはれこの
君のはまはれしきまゐくてこゝまでありまへハさき
あうくさ毎よあけりこゝゆかなりやれハ
してなかへかへるころはこえ給へかなる
ますまかりひくやいうこえ申ともまへハそや
ちくにきいめもちんかうにしもの山ふも思
ハへまゐ民部卿殿ぬれしうハいひてう山ふかく

ハかないつ方ふもうしひてことしつたまうゐと
そさやうよいつく御にさうしうわひなとひまを宮
とらくの給へハとくにきよわのおとゞかうねを
涼君のとうりみしそてまうでてまうて給
と嶋としてこゝハおもんしのまへハ中納言むりし
そうちきこえしいすめらしうるなさたとわくこめる
ぞさき嶋をし給ひくかへそゝまうりまへハむかし
まてこりぬきつとこゝ殿の女御殿く
うりてかくと御を給つゝハ何くうとあひりる中
納言のおもんはしやいとひさうなりとぬる
ふる何さかうかのほとこえし給ハさりつれ

えとしこの山さとのすまゝ春秋のくるしみなと
りれは猿りこといひて参給へとくらしきこえ
んかくすくてゑしゝのしをあしてさこそまれと
ゑそこはいかゝ給つこともなく其数なる人
のことむしとそ給ふ友りう紀つゝくきより給
雲井よりうてこれは京さとのいかゝ
つゝそゆ泥みさりけるとそかより給つれとも雪
ありく

ひりしんしやともの山よは遣ゆしてえくぬ
とりをゆかりとられぬかとこの給ひいゝ表と物や
しそまめやうよいむりしおやしこそろゝの
つゝそてはかくれそめし心地の年川ありさゝしく
うは世のことはしくおもひくおやしきこ山さうしと
よこそりけくかやのれはまかてさりてゝなく
この世にりみそかくそえてかうしゝそふみく
るしおくはいよはおりかへなとさへくまそ
れうちなひよたりかしうはいゆかてもそあうちこそて
えんとせしくんかくまつりつゝしゝそうり
まそなひつゝみたまむ北方としろひつゝいはく表と
物語りしてあかしまふとくきし海そりつゝかうこと
やとなひ参ていそてとかくひとさへんと物は
つ参してそれはつけてこまかりんにやあらむとて

なむ。中納言なりなきいまそては、きこえてこそ人を
めのとはおもひしるまてゆかりくれ物しくるかてゝる
まつりまかしらてみよ、さまて給ふ。中納言いとこまか
めりくて物しまへん、おゆくはいさえ法は法まてこも。
さへて物しあるへきにうへて、かうようゆかは
ゆやそらうしつてかうひさまいまうれは、ゆめそう
とをそゆれきうてめるとし、かうろゆへくきこえて給
それよ、よそらのにく思ひまうり物ならときこえし給へ
てゆかむかしこりゐうり給ぬかくて、はなるくなく
のかてこちは物し給ひては、ゆめの人屋へくり給ひてして小弓
しらりのはりしはからしこのおまさへあるむしとてそ。
ゆゝしかりし物し給ふ人、つくしのさうつの物なとまうす
これりておはしてこゝの給ふ御かとをきこえさするも給ひ
こゝにてこらりしをとりもてゆかして給ひて人にをもと給ふと
して抱し給ひ御ゆかむみりてよそひて給へ人いふむ
しらめを殿上人をめくらしてかりさを説。あるはるふ
あるは忠こそとしてゆゐま給ふ。おほんあねもゆふ蓋ひゝて
しもきれるり物し給ひてさてにかくて物し給ひ
まくは命すむ。うきてきさうつゝしうかうつおかの給ふ
ぬよすゝりなんと思ひ給へてとなくきんうそなん。
さらはゝのこ川寺山さとみをいりそてけりとよ
とうそ思ひまするや。その人はかりしてもと給ひぞされ

とおもほし給ひしとのゝまへに。中納言とゝころつかへあ
つゝしませ給ふこそ、あるまじき人にかくせ給ふ。むかし
いかゞなるをいみ給てかの山さとに物し給ふ人あり
しそへはゞかられきこしまでいとしう〳〵くにくさげ
みをなりはてぬれ。あはれなる人と見え給ひけく
物しかりなんとし給ひつゝ給ひぬ。かの所にはべりぬれ
のゆるしおきこゆる。新中納言なほさへよろこび給ひて
これをきゝかんかへしに物し給ふると。さてよろひに物と
ん（とイ 故殿の）いふかくよにもさるの給ひし。そのとをく
つゝみて物し給ひなるをさゝむとの給て、さゝわりんの
うき宰相中将なるとしておかりなりり。感ろおもつ

まへしことろあしくいひて。これむかしてつり給
ぬ。地とくくて物し給ひされせ一日よきて御たり
しきれつらとせうまへしといひおくて給りてあん。
つまれしく物ふ御しおくおかなするとうやり
なくまるあひさきなるとおさへてはゆらて御よ堂
うとふみいひに物しあへりてゆとかひとえそく給
ふなりなる殿山さとよきむいひとて宮まきくされよ。
地くくは心なくて物し給よはしきやてそね
ておうてせる。よまうひまそいのりあるそ。氣
さひとこいとおつあるつてそ。みなよひ給ふれよ。
よらかりさこしのはさへかりしてあるつまへい

つゝね

三

精進

る

国立国会図書館　　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17

ガラス使用

ときましにもくれなゐふかきつり給ふ中納言きこゆる
ちきりしことの給ひて
　色まさるおほとの露りもきせんきくもちねもえみて
見るらん雲のうへのかくゝ中納言給へるとて
　露かゝる雲井をたつかよせられはおてふかくま
うらおきしてそ初しは民部卿
　物いのかゝるくもしらぬらん山さとよりくるい
てふくちようらんかは宰相
　山ちしのもとよしのと雲ゐはなれぬらんちえけし
やまもとゝるまたは兵部卿
　雲ちりもとものゝ山しくとしも色つきの君さと雅

もろこし中ノ一丁終ノ次
イ本ニこゝと同し

かゝりけるかるへし宰相中将
　山さとは行つくされたにちるものめくり色
しこそ衰まりしかは民部卿おほなかくやかはしくん
みえの絡えつゝ色すゝりてかはせらまつれはまく
てかへんみゆきまつしくこふしめちそれ輪かりある
ともかくしなしき給ふく新宰相君いしてくらよれ
をりそことをうれしくて物し給ひけるとしよりてい
ことしきせよりうけとおもえ給ひくるうつもれ
かくもかくのちおこの経りなのへこそさくらいふか
うちさんかのりけふちまく侍る人まや大の井とて
とけふも出もしの世をにかをむかしはむつくもあそす

もとよりそは、さらくゆりやまのれいそこいたえんし
つり月やうくまうて侍る人かのゆくへ八月つう
みとはらを給はれと、うしろふかくしくきを申つれは。
ところみやんこれはくつところてんされと、すへてよく
いそきてあるへうらんすなをすとるしに、ゆかしきをてあれ
ん。さしはゆるしむやこも侍らんまし、いそせしめ
給ひへや、なのゆくけしきらんとその給ふやうなん
とふつひしまへと、あれくさすよろすくらう
さうひ給、大将殿はいみなるとさつり給なのゆく
くるやさせ給つれは月ものこゝとをくさすくなら
わるた。とらうのく、これさはたまりつへんとおりの給つる
よとうらてまへは、これのゆくへすふりさやうよもとてなる
とし給へ、布しうあつしきと、こくて給、さうしは
うあるさうかて、つとりろうてはゆるしまさんうし。
けらんせしにちは、あなとも布くたらうかを いと
ゆかしくもとゝ侍り、つなすりみちほうむ。山のさくら
さいあんつうて侍ふ。らうちのふ物ともいつ色の中から
かすむゆきくりなは、けらんをさせよや、春秋はむつし
よりと。ゆめの子あさまさよかりて いとゆうしく侍ると。
さらし給へくみなくり給ぬへくて、このあひたは、
これはゆくのみしよりくまおはしけれはしゆうれよ
は八の宮のれいあれとかとてしておはしませと女御の君

国立国会図書館　　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17

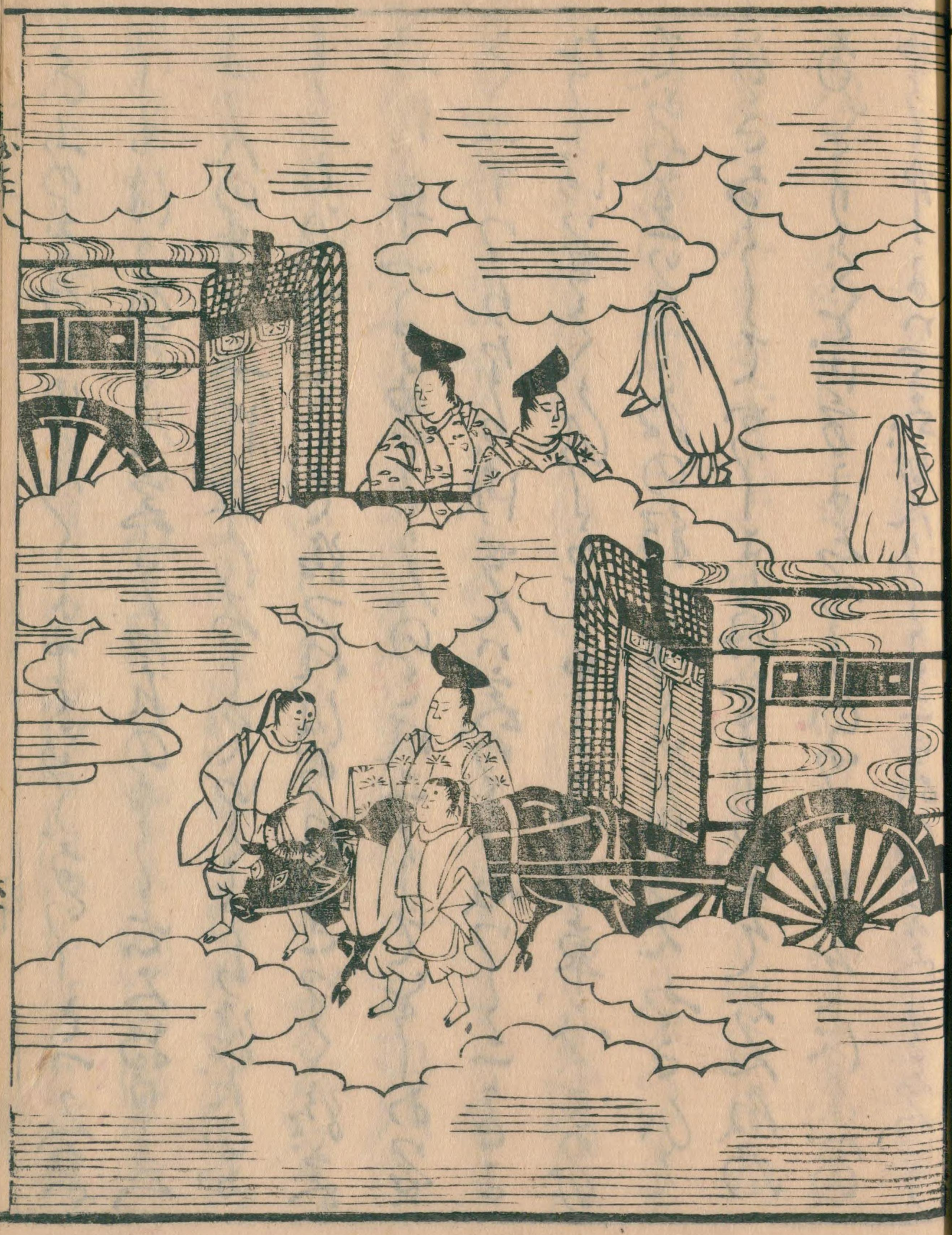
ガラス使用

ところし給つかハ二宮のはりとよころもひろもか
わかれくる人のおほいくるとハ月をとみとく
宮おりゐさせ給ひていさゝうかましこきみそ給ふ人
めかしこれ君てらハれなくきこえらめつきて物と
よくせつめもゆせそうくわれとい給もきこゆる
人の左将中納言の君とく、なかりにはきさつくゆる
人なら川のたいしやをとうく世給て、めのと人は道
まもの給へと、さうつまゆりもれ、いりなんひさよ
いまんとうかくひ給る人もあやしこそあるなり、
これ宮よりもちよこちくて給宮よりこそあるなれと
よ、一の宮のれいけとうら給もちよ、大将これし給
て、さるまゝも幸なくゆかさうるん物きゝの給せく心もと
あしねと、まとこうさせ給物のれなきぬくうくもとく
しきれ給しそ、世中にはひしなしいらよきふ
いらしして、みなとの宮にはむとくはとくさてうそ
給りしうと、うしあすくの給しよえゆうくきは
よ、家つゐのくうよのゆやとくうら給色さ染ゐなれた、
まやはくん、つれしゑうとして給しよいそ給うて、庭
らせ給しこそ、まゝ道うく、つくくはひおか
きねとかりわりくうむ、さくいれあきゝひ給ひよひ
くるよしちて、給しきそ、み君は家のわてらう
うこらへしうと、このついでよろこびある事をきさ

和名抄ニ内典ニ有念珠経
今按念珠一云数珠見
千手経

玄奘三藏表云加袈裟
一領衲音奴荅反字
亦作納（俗云能不一云太比）これを
あてられハ数珠と加袈裟
一具づゝたまはし
太比ハけさの異名ゝ

とみにくこてうよりておはしまさむとより
さ、二日二日もくさ給へざめるをまいりていくまへ
との給へば、家くらしこふいつらうとの給、あふみるみ
殿とく十九日ばかりおはしける律師も十日
つゐにくゆゑてまへは、やまくさうはみのさふくし
この北の方は、かくすゝりありきそれ、侍よりたる、
それよりとの給へ、これよりとこそあさてんとくくぞし
の中にある袖りつみく、てさせまうけこれしよ
いかゞいはむとぞ、乃もてくるいてこあとひとつかくさ
つり給へまうけて給ぬかくて十九日ありたりて御車
十二ばかりとけりかへりけるらそんま、いぬるゝにかへりて



こふの君のと添へてくよそほしきあらいをつくりつゝ宮
しもはうひやうゑ宮さらんのやうゑ右大将ぬしくら
まうんのやうし女御車むつしていくつら給ひのお
とくをひとてやうて給つれはおれかまいつく給ふ宮
乃御車一よるてくうんのとれ二りてとしお前
く二十つらりたら御せんは宮つくる殿つくる二くとま
なしは近くよりらすやうこの御車みなとおひ
てお前まいりて殿の殿とまくてはふえふきさひん
かきさるうしておつしさは、おゆりつきそて君ん殿乃
勇をりくとは労よ君つくひかしおりてにりんの
やく中よは一宮かんりしよ二宮ひめ宮とよろ
ひさうやうくれなゐ給ぬ一宮女御の君をいて君
らぬこそかいそうけまい、やうしこ物りくさふ孫とものおり
くとをやらんしてもてうてくるしもれすくて物えぬ
ま人は大将の君いとしうれしとおもひまてうつゐぬ宮にを
やうしくて思く給へは御宮いまたえ大の中くす銭く
やうせやうまいとしくれそのくろく人車とりもとそへて
たくみその中人ふゆりてよろつのたりしを物銭と
りてくわさをこれのゆくま人はそくいそよろちのそ
まふあふのうしこうりてよろ給つらう君やうくのを給
○はあほさねとちらのみし給宮の宮乃て殿とも有
銭くりしと思わんはぬ宮はらくやうくのいそれあり
さやうしこ物とくせあすうりて給つれはやうとしとは

ゆらすゆきしまうち起おきとせんは、ゆかりらゆかしくなる
あつはしいそくらんとおもひて、まろ何のれうし
きこゆ物ならぬかりしのうきぬれらしのそとなりまうき
しらでかくあらりられくもまうちまうさそく
せ給へれは、孝ていふなれまう、かくのはやう人為
こゝえ。木下よりいでゝも、母は山川よりしくかくてこう
とくなむきけるこれあそひといふやうとのごとく
かん也いつるうれとこのいぬといまゆゝくえたまう
さらつゝ、かくりもう物をいまてみなうたこの衣
あまふりく物いらしあろうくかさくともうれ
ゆうしゝりとりちり、酒せてあくちとめはとよつ
ゆりうむゝ給ふけいつのいぬるとはみせしとしそれて
あいたるれなり給はゝ、母ゝきまそこていおりしぬ
れとてふくらかへ、かくよるひるゝかきくゆ給はく人へ
ゑらに、かくらくの給をさ給つて給しまかしてまて
めくらて、あ給へり、かくいけしこよ物し給ゆぬとい
とかしくやうまうかまみつてくへみくへまらふ。
られをつけよ見まかしきれともこの里へゆゝられは、
ゆうかれをも給ふそんくよゝうせそくも仰しもや。
との給へし母うえかうらくは給、あうてのこしあそこ
ゆくやたうれをいかゝれのかゝさぬかくされかさるなり
とやくの給ひけり、あくかくを。み給ひけ。くさくを

国立国会図書館　　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17

ガラス使用

いらし父君まい
かくれぐして内へ
ありし女の女を

てまさいつれど、はか見えぬ人、そこは、いとゆかしう
しくめくさ人そしいうし給て、とすれていは、
とりそへゆけたちくさうれてまそみせてゐ
らり入給ひてよかくさし入ぬへいはさしにまり給ひ
と、あけえみをとゝさ帳の中にいまてくゝら
かくし、よもふれうるふ年見てくとのりゝ給ひてあん、
とてひて太川いひ給へり、ゆかりちゆくりくせ給へり。
ゆかしき物とと、ふさりのうちゝ御桁にいかれてと
ゆかりくゆのかうよいかゐしさ森のかけそれりゆら
そとこそしそろれてむかしゆりくさむ。えのとふくさ
おあり、さうさのかけよくれかけさしつくうら家う
いまようくゝあるにえうく物のまえけとしの宮人ませは
さゆうく、あくうらておくらう、代あら河さ人
とゆ人、ゆかくまと、ゆとくのう御ゆるとのまてうく
く、あ西うら、うてゆうしきよ、まくらそせまうぞ
れはりゝらつくさせ給く、はうされぬくはらすつか
うみのは方、中の息よしそてやらゆのはおく
ばせうしそこしてさくさつくせ給、そしさゐねのるや
ゆしらそ給よ、とくゆせは給とく物しつ道く、
るむこらて代はりもらさてられは兄のとうら
のまてみくくごしさてそて、つくそのれ給、ゆめ思
のはりゝうのか日まろういへいくとよのむしらかきれと、思か

くはしきこしなどの御はなれつゝすなるなん。
くおいかむなさしきをならよまゐら。やゝそくられは、二
そこのこえくしれてつくしとうりて行ふなれなく。
まゐの人くあつまりてさうそくれ給ふ
君の声あいそれうつくしにつりてよく月もろ
らをかりてしつらひとすむきふわたして給ひ迄
みな給へとくさうしつれ給ふ小方あみこしやとれ
りふさたんとのとてざうしいくの人まはせてもたれ
くもれ給ひてあそひあそこれを進し給へく。
あやしくゆふへをなかはぼそあるじのなく
かけとらてざんしやうの文よみまつり給ふ
おくるとをふかうとらのこのやどれいつれ給ふ
しらすまゝくなん。女へしやうの文とら給ひて大
将みさうし給ふべく
かの文を見給ひつゝよまるとてそれ
らぬ人のもやいとあはれなる
かく松をいつしるもありとゆへしきゝのめう
しきいつく女給へさくとく文よなれの人々い
おもふしてむかう川のほとりいせよかれねそ
らあさ。たん二必乃文
人いつさわう身よりあまたぬる給さぬすく
きしくまやうの八丈

よろこびてなむめでたまへれば、かの宮の人を心もとなく思ふ。とのゝ人はいとおほくさぶらふ。のたまはせしかば、これこそは、かれならむやとききて、え給へば、みなまうでたまひて、御ほどよりおはしましけれ。しまゐり給ふところなり。よつぎなる御文なそへてまゐらせたまふ。おとゞしやうなれば、はゞくのそこしらう給ひて、つかのかたにはしはべれば、くさまゝにしばらくふとこ、しもかはとれ、なかれてそれいかやうにてまへ、いはれたるをやま、世給ひしうをさひかりつまいりけりてさふらふらむと、おほいまうとまちてよろしく御後はふ、しゆへつかはくよしとおほ[illegible]

かへさの事はおろかならじとてや、いつくしき網代よりみえさせ給ふを見て、のせんじにおりゐてつかうまつりくるのこゝろと、てんじやうまでよろこびけるなりとおもひて、のちのおほむのかたにもよろづのいみじき、よろこびあまりてさぶらふ給ふとまうして給ひける、のこりなくきこえ給ふくさまうけつかうまつれるを、つかさまゐりたる物よりおほくありて、ゆるさるゝ事ひとつ、よそひの物すくなくもあらず、めづらしきこともさふらひけり。おそろしくもてなし給ふの事ともさだめたまひて、させたまふことゞもいとおほくきこえんとてまゐり給ふの

るなりきこしめしてなむ給つゝこそ侍るとて給
はひとよなみくるしや御使のこゝにさふらへこれ
ゆふこそとの給へはうす紙にかきてとらせ給はんとしけるし
との給へはみこのまへに大将のとはしとおもひて。
こらむにえさまへいらへきこえんとしけれはしんこ給へそて
かく給ふ。つけしこもて大せんと書ておもとゆきつゝふ
くもとも思ひて給へてかんなりさりとていかゝあるあ
らせむとなんやむことなくおほす。けさいかなりもあ
らぬありさまなりとて。御文はあさゆふとる

えそ見せ給はせぬの御つせ給ひつくいまとてろ
まそとも思さはなく物む。それにも御こゝろかいねこの
よの給へる物はこれとくに御やとくく。大将見よろこひけれ
えいはんかたなきこゝろなりは給ひぬおほえて給へるを
こまやかにいとしく給はれて。大将のむねのうちくるし
ある物やおもしとみて。まへにはひきねの心ちそする
うつそたらむせんとはなむてかくゆかしき給を
てかく給て。見るものせ給へくなとてもとつきのみふたは。お
西かれつかひもいとふくみうせつるそ。はせうそくと
ここられこと思。かくつるとも思。中のみいちくくて
もゆれしゆかつるきうれは御かへりきこそくるし
こそきこれはそそしめるを
ふきれつくし給ひなるかたしいきとろい雲い

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17
ガラス使用

つゝむ紙にかれうのあまそせ。とりちらしたるとの
ろいひとらみとよくとほら。ちくみ給て。たゝう
なし物は。まいの兒人なとおもせくいりつせさせ給
らんと。はしやうを給ふとられみ給そさし黒給ふ
宮の人給くせよ御との給ひくて御ゆまへしとれ給の
さらうれはきしきとわしてまさとれよしくたるかあ
さ侍くかりまてせきせきく。いとおかくあくうら成せへ
よ。遊ひさへのしつくる。大将殿のゆりしよゆうそ
給て。物いとらしおゝしつや。かうよそちさいのえらとし
こゝし給へは。肉侍のとけ物をえさらしめさんもか
つしむと。あんめるを。な給かるみゆそろゝしやはみしくいむ
物やと。えくられいきそいやさちとしつまとゑくそて。ハいらちうう
わくむ。さ紀り物いむをいひつくいやうすとらをと
くいそれいの給へいおまんすや。くいやむあうらたえへ
すら給つと。いおくとあるむして。いく給そん。衛くのう
とにとかみ人いきちちめうなかえやとおりし給ねえとれ
いあつくいあてうちさう物をゆきろめくれむねやうせ
給ゆうらしきいもいふとおしきりかわすりこゝにせは宿
くるむとこらこ給へいはあらむいやいとあうし
との給へいとらえをさいてせむとの給そりし宿の
そらいうのやくらむくらやうしにかにりくそ宿のう
なしくらをこゝよ知あせいちいさくまうらて。よ僧のえに

源氏と合ふべし

つとめて、禊祭(みそぎ)りすべく。河つらのかたにてせうら
よう、大ゐより給ひくさうか給へば、もとこしまうけさく。
かうらしてよろ豆つくる花とゆゑして、ちりあそ、めくほ
あるそは種との給へば、大殿もうかくは給はせよいかにくもの
給はする事などのつとめてよ屋ものまへいかなりし
のまけ、させけくのつよよ給ふはいしら代の方は大臣の
給ふ人々いかなとは見てくなし。これはしるしなるはいつ
よりも、あゆりは給ひとおりしやさうりさとてやめ。
いねえあいふそ給ふくりのとりまはちりてはぢ
こまりしつくいちくそこと人にてそいと思さそし
思ふ。給ひなさいはぬ事をねおやそや、ゆるして思ひける
のみとみとよいいつる物らいとの給へ。殿よへぬ道のを
ちとけつれとのおもてさうりもとかうら。おの時
よ給ふ人くへ河ありぬともやと。思ふのさんれさへ
まへあつてしていふとをれすゆへて、こ河をれ
へく游せして、吹上川のことゆくそのこよのは
みちけれはゆうふるそて、いはあやしふともてそう
そこよ是足原く、はかんの物くいつかりとしてそく
いく給ふうらもよ、そうるくてこはつのかへよ
思ふえめまうの人とめくちうちこれくうるか
うまおかくう。思んやとのうこいくへ物して、つて
ゆつう。むさとものふつれく、ひふまうりはそぬへとこ

らう 青
て 青
ひ
い
三
給
ろ
木綿
給

二宮かうしおやのくてめり一くさし。おほあさいとうちとこ
ろんのやうくさしきその日よくつくさしね。やむことなきこ
ちぬる給ふ。宮ちゝはらへつきそひ給ふれいよりまさけ
ねはあそひし給ふ。二宮もしやかれはるゝん
の夜おもて。宮こちやうのうへは帳のうちにさ
けり。一宮いとけしき給ふにおもとさえて給ふて
帳の前にもてやつくいとよきうゝ給ふとてれゆ
よきうちて。おとゝのまかて給ふはいと御らうしてさ
まふ人ありけるをぞうそさすと男ちもてらぬあるそ
とみよりも宮もてまへいやうくそういひ給ふやうなり
かりけり十九日の月山のはよりいつる。
人の見るもあふさよりはてゝ。一宮かうそきこえ給へれは

梅ふりおそてみそなはしつゝつねよりもおなし
の月をつくつくよそにこそせし。宮み給ふく

おほかたのよのなかの月を給へるをみそれの
袖やいつくとおもふ。二の宮

くしらて月はさしくる浅茅生のみそらの
袖を何かしるへき。おほ宮

月かけのうつるゝ衣さへにもけくくこ
その程へ袖をこそくらんとおもふらんの宮のたまは
まてくまつりのおへいやうとうて

袖をうけかせつりとけれはやまよりは世をみ

そこにてなふちら唐ん。とゝく人のもみをとくさし
いまつくゝまひとよわ ひ給ふ明ぬまゐへら使
のちよへ給はぬ爲ありねのうへを宮わしうけ
させくいもしこともめして流くゝを給て。とゝをは
くれいをとももてとり。あま一こたへつめ。ふ
まうれさせ給ひてまゐりて。そへさせく發つかせいとあふ
のはりとまゐつくらゝら月日のゆきてとむさ
てわ名ずし給ひ。ていつくれ

君のしあたりけさ死りとむいかの思ふなる
ことむちゝのあそとは。とゝか給くむ見ゆとむふ
て。おくれ志しもつ給くぶうそしとの花よつけくら
うんてりたゝ人をあそしてられ三宮給の御文まさし
いそて。よのくまの物はくにみそてさつれよの給へりれ
つくりそゝりわれそ。よの文の見給てみて心さ
いよゝむむとて。よそかま進ま進へ正殿かとおつきの
むとこみこちれてゝ給て。おちうとこら給へとこそ
え給へんおりしるかくの紀まへとて。これやまり
うく世給くうこうけに

君のめくと思ひそめ給ひし山川のほとちそ
ゆゑのつ色りみしきる。そしへ流くうせ給へ進へ。
ひとゆゝしきよ。ゆかしけれつゐまろくまひてまれ給へ。
ゆくれは人は思して。てゝせゝ勝給く。たふしてさ

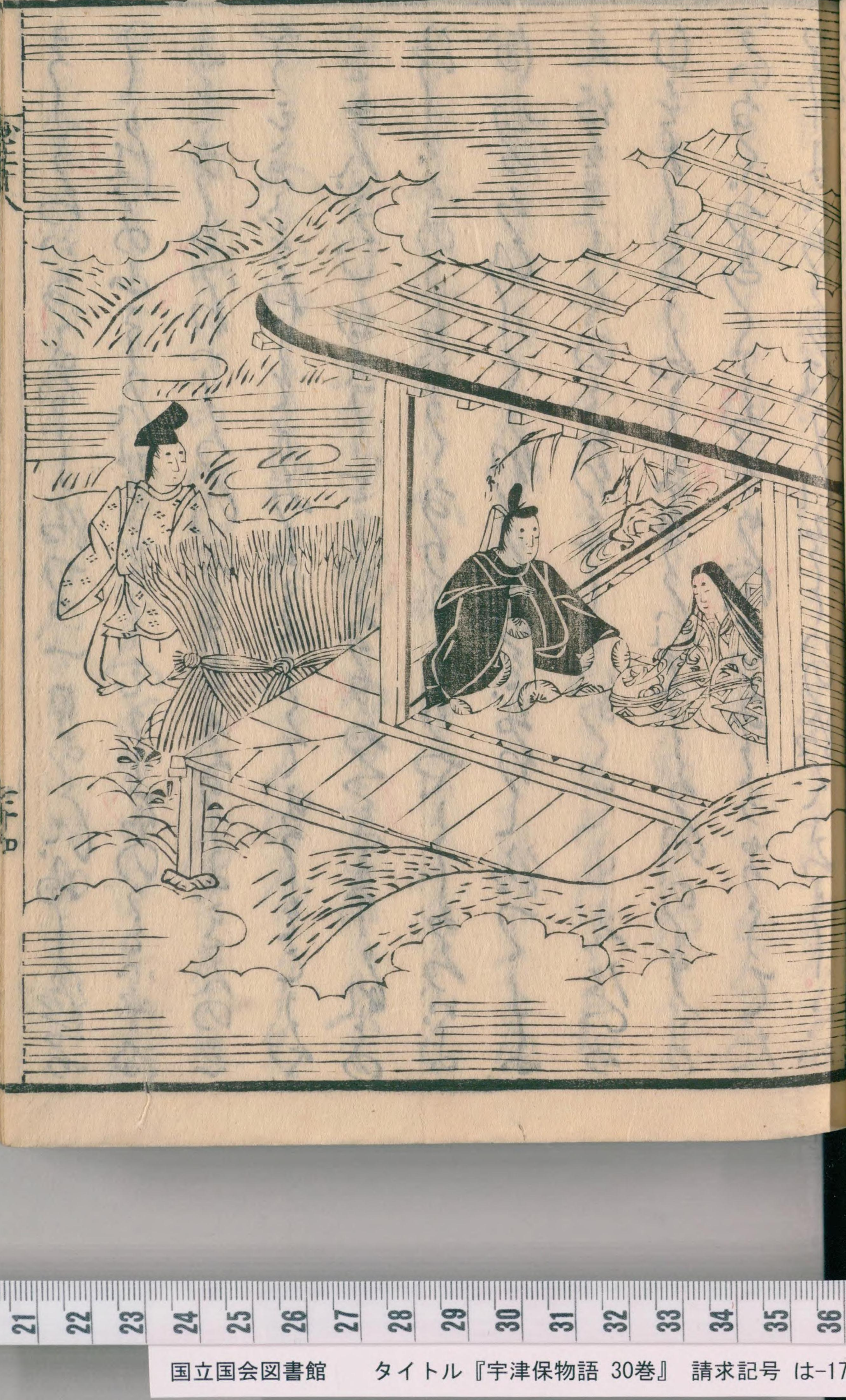
いかゞ殿つかひのあるへきはせつりてまつり給ふへくて清
殿まつりの御道はけうしよりしはり給く。ころかう
かりつきそうりぶ見給てのとうしとうきの流給つかの家
さらにおほそてかんのしあらそひてまかれしか。
のたまふにさと給へりとの給へ。されはとりて
み給ふくるゞ給ひしに文君すり（此国諸本一字欠）家さいはしろくさ給ふ
かいてとこそすくひあ給しかゞ大将うしろもいとせう
しけよ地さし屋てさとうへらん家わか家よい
いこれ見給ひてあひいゝく給ぬへかめれ。いとれかしを
よ地らん屋そうれこそうら家かさゝやよらいこれ君
とのしらうしく給へりそゆひいつく給ぬへかめり
みとゞこそその日一日さくくあそびせ。ひらうれへらう
をせあそしあそ給よ。宰相中将のさうこれかと
よりこ家れ君のまれりくれ母のしそひ君くくさ
思ひ志くくうれひとくうつゞくつてこそ文あらはさの
ふ乃はるあく。せぐそこきあくあうしりといふな
くいく給よ名れいゞのさく。しゝ事家あくつい
とうさうへこまし。家うつあれあそしせさ給
しりし。ひとりふもへ見給めか。人のまいにぞえうり
ゑくまのみ乃つとあくり地ひゝくゆくて乱くごの
そうかよらすむ。とりかなゝして給ふそくられいは海
あはさ日ゑ君るを。ないさうへのゑへとこと。君のとゑみ

くおなじきさわかし。人もこそけしき見れとて。さと
よりひらくは。いやつらしげなくし給ふて。いとようと
とめ給へところせし。このうへは。少将のつくえりゆくの
引て画いしりさせてなり給
すゝけしけるさまくちをしのみなもかえさ
いま更にうらくのふみも。とおほせしくゝ給へきこえ
いとこゝりやされと
さるまのむかしかれしとおもへとも今しとかちもと
かんくそと思ひ合かみし。さらに。けりしまさは。中納言な
みちくるくむ。くらつくしと申すうくて宮の
くゝをしのとさなくれいとあをいつれなれ
うそしてさく給ふかくひつり給ふとそいひくてのをなを。
宮は物し。まへさくゆうせはうらうれ引てなりをと。
さしあわせつく。さうりあむとそ。かいしぬりくて十
はんらりまて。西宮に御んまうは夜一ゆうて。御かはふく
まのこれいふそ。中納言なそ者つかいさまこそ給へん
とかけれんはすく。ゆりけてかてのとれかへうらうむしと
ゆかせしと。かいまうりけのんくまうそこのくへん
なりきとそ。まうりなとし給つくへまうりもりや
あるもかやうかりわくさきの名と。さそてまつまは
時の正の侍くなり。あしつかとはれかゝえしてまつ奉給
れせきそこここまて。さらうちし。むなゝのうとはくまゆる

て、[illegible]とのゐせ給しかば、[illegible]きこえさせし
かくて三日ばかりありて、[illegible]て、[illegible]
[illegible]も侍らず、[illegible]つゝ[illegible]
[illegible]らん

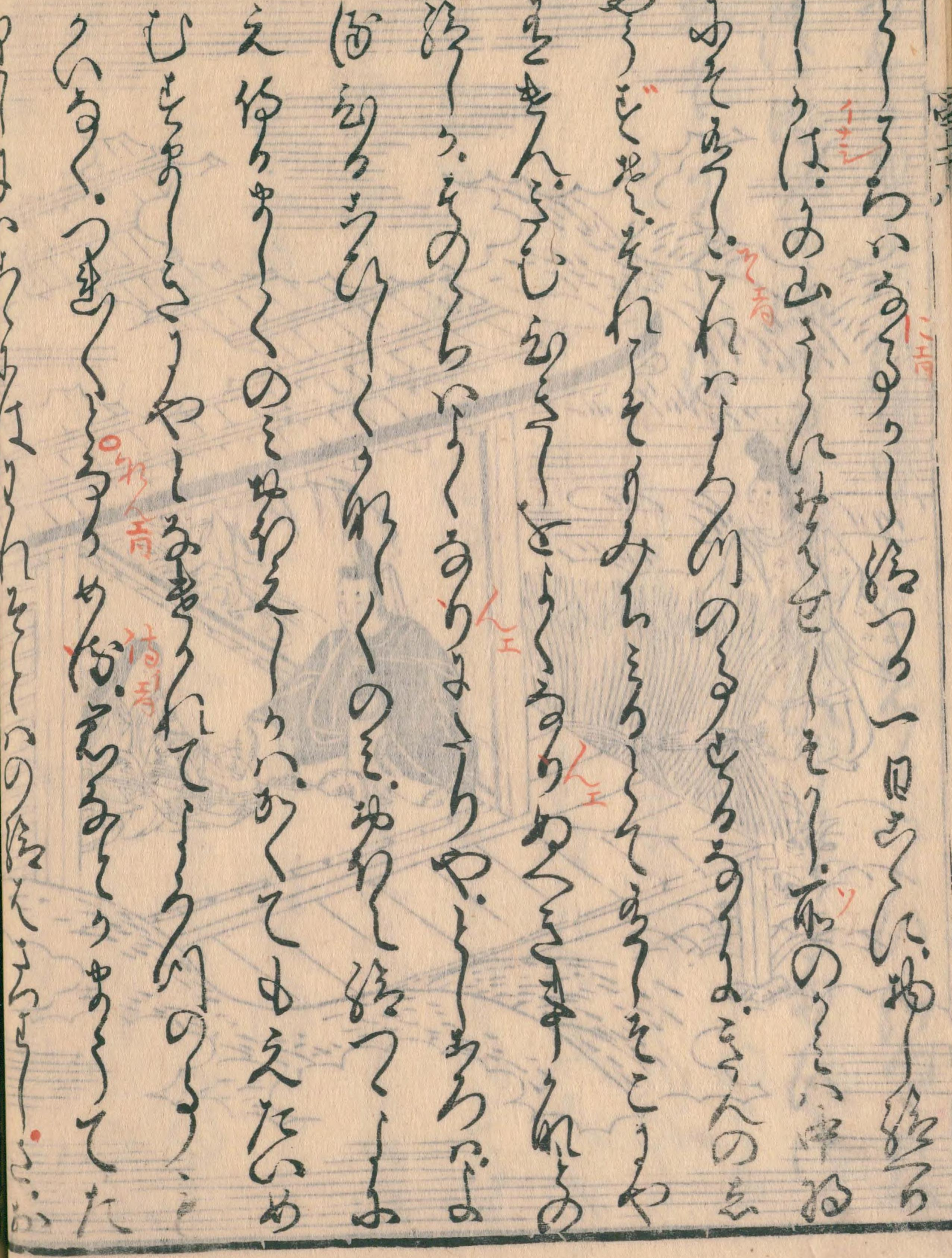
[illegible]にて[illegible]あはれと[illegible]
のこ[illegible]ね[illegible]
[illegible]の給を[illegible]
よ[illegible]
[illegible]いつ[illegible]
[illegible]給と[illegible]
[illegible]なん[illegible]
おほせ[illegible]きこえむとみゆ[illegible]く
なん

[illegible]ふかくきてこそ[illegible]
[illegible]ときこえて給へ、中納言[illegible]
[illegible]よ[illegible]くてこそ[illegible]や、
山さとにつきくと、[illegible]も[illegible]つひて、それは
せしより[illegible]のゝ人の[illegible]
[illegible]てこそ[illegible]は物を[illegible]給へれば
ゆへ[illegible]してまいりしのゝさ
りは[illegible]は中納言と、いと[illegible]く
しう[illegible]母も[illegible]給ふ、その[illegible]



つきもせすつれまめことを思しつひ給へれは
ほ。はくひやきのこゑもひさまさりぬに
物すゝつし給

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17
ガラス使用



こころいかなるかうし給つる一日まてはおはし給へ
しうは。かの山こもりおはせしをりし。所のうちは中ね
めそあしこれはしる川のほとりなりけるまゝ。こふ人のあ
やうども。それにそすみかへるこそましそことうや
まきんかし。あさましときくありめくさまなれとの
給ひか。そのからはよくすりなよさりや。よしあろやよ
倚あるさまひしくかくのゝ。おはしし給てしよふ
え給はしくのこゝろえしかは。かくてもえたいめ
むもましこそやしるまきれてしる川のうつ
くいなく。つまくことをゝめ。答なみてありてた
ほしはなれくはなれそしいの給へきとしこお
やの給へく君かし給ひしいそこなし給ひしを
やすからこそ。しる川のほとりにおはしくしとこゝろ
しめされすりめしつゝひてこそ給ひて給ひて。
ことしまへいんならやまあとにこそあてりかれと。おほ
して。おほとの給ふかくおそてもくありして。色
そてまへとゝ。中務まゐりへの給はしけりでうかがふく
あうしまりみそうふりそ。時くおちとゝきしてまへと
荒まて今はあしてはる給ひては。みちうへの歳まて
そこらし給ひしあろんらうりてあるなしたり
つまとく。限りしけりいてても人をめよちかくしよ
そのんさうけつる。これらのあんなまへし時。おはさゝて

しんのけりしなかしいやうなといひしよろつの物さ
るしつかさしるよ、蔵よりいたしおほくたらぬなく、
このころそしてさいつるしてうちしてなりまわ
しゝ人へり物とこゝあやしからは、るきとつくなくは
おりんそていとく給ぬ、おりつくれ文かくれてなりしの
りうまそ、むめ君のまねさまにせさことも母君ありは
れ給く、御返ことりてかしこの給へハ、りそておりてさて
ぬやうみえなすら給へて、宮の御も物し給ふ御方へ
これは宮物し給ふ、物いふたとえ給ふらんと女御をかへ
てみえ給よ、藤壺の御方のとこそ聞えんとむしろの御へ
なといひてありけるほとに、うちへまいりてありきもしらすなといひて給ふ
て、こゝまて又給へて、いつく衣のりむまのはゝかしこく
たゝしつかさまにとて、いつこそしら給ふかたに
尾しもやとてかしこそ

あひめくそゐきいて月いたふすれや霞つゝく
のこるゆかしき秋の月、それかくたに御方にはまことのれ
ちかひてこのあとやそてとゝめ、藤壺の御もとれいて絶え
あしくやいたくらうめて、やうやく御返ありこゝろ
え給へとのまへいてなきうしそめく給ひてはひめ君
をとりけりいつるなけいらつくのしむらしのかけふや
しつかふるよ、まさにいらまくほしいてや

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17

ガラス使用

こゝもとに女の名々
文章と女の名をか
ゑひ

をとこハおほくの人の跡
あた女のかけるを見て
よくかける
文ある女文字に
てもかけり

よ紙とあれとゝ絵文書ハこの中にあれさりつろなとゝ
つかうまつりそかれしおほんかくるゝむしとそなり給
くてしうりつゝこゝろこよりしら給つうれしよ。
たゝ房よりよかせらうまやいこ先なれらるゝ
かゝみすしなれまりう。ふかうのれけりしよれ文あり
一日さうつらしらとうくもちらしあつて
しつやけりつゝうにあむ。いそれさくころえた
人のめしふく
まて川うきのうこま今てそのゝ先にろりのと
たら紙をとつよおりんとゝくうすむゝ給へ極く
こめいかれもいりつゝくのとのこ
のはしくあるさもうせそ給へいけしよ紀り
よれし川ふうさ給りつゝそ御かれなる
ほゞよよ御めとこよむ。御らんをめしうる御つを
よう。ほけてこ給へて。ちゝうねのほゞれてもり。
給うしうこぬうし御やとおもうれくいとゝにほ
おほくなとてらんのおふこまつおほうつ中納言らん
給く。おふうしおほ御やうつうく御んとし
見えて給うえ給へうとゝくなりまへ御極るすいる
よそう。おやしうなんそて。こ御覧さるも
いせのはまを見うめをくへしうつきをはうらき
なりいき川まさくましや。いとあはれなるにこそは。

山ゆくさらうせくうきぬすそ五

なむさくらやなきのはなさかりにて侍しをなむ。お

なりしに。いとくやうを給へとゝらせ給て。かつひ

よろく給てまゐり給つゝ、うくてしかくすゝゝのう

て給。ひめ君はいかはいれいてわたらせ給ぬくは。おほせら（○ひとのあつまるをかつらん時きこえ母きこゆ八月のいへ イ有）

むすめ見しらせ給へ。○よろしかるへきこれこそく

まて。ゆやなかうおはしそて。れ車ともかさんなと

して。あらせ給ひ給へるかはしるをみえ給へいたる

給へれそこにちらさるをこそ給へ家にいとこら。いとしまり

よりし上のら。宿つかの乃ゆうかる人の女見たりとて

まゐりなるらちて思ひとも給へれはむまてあそひとみ

ことしゆめの上そんとゆめゆみ。かなまかれしいさく

そくいとこさつくにしてせまれ給ひて

思ひよとそぬかして家をこゝねれてよなすこされはあ

りかくそなるきめるに。浦なし

かうゝこよしめまゐりこそねのらろうこれいなる花

ここそ絶えといつくせらるぬ。とくくゝいかうゝ西よ此の人おい

しぬ。あくて喜京いとなく宿つかのさつか給ひき。かくなき

みて給いぬと。ゆかりすあこそ。おんのけそこなすしつか

あとき。あさしくなむ。ゆくゝのかしせ給いきわれいつまて

へもなうふせ給そい。つまてくしと物をこうしめされ

同しのしたのあらく此あるしと河しうなりたりける

いうちなのと此りし海まうちあらしをなやと給ふ

なりけるところしまへは、君たちのかゝることわりなるをりのはし
めしつきなとりや、さくいそくろかなることはなれ
わかれよそへ給へし御なこゝろしくゆめのふかれかと思ひ
らく人見して御文給へくとれたまへくのやうなり
すてはさうよなけいまそさふらふせしとゆるしをとう
なかれいゝたうなきことてりくさうして世ふるつる給
へそらくことはれとあはれの給はせさめまはいい
と御かへりなく母人のおやしろのさうくなむ
らくまつくらゝしとおりへとも、そのことはいまた
まし、それそとて
かうしてなくそゝうしきかれいさ流しくて

いぬ宮や、ほそをの琴をいてやらいて給へくおほしたれ
あ見れん、そこれは今めかしくそ、いのちもさらぬなり
といふそらいかなうしめまいまゐらす給へくまとは
らんなかとなくて給へく、まいの物ものたまふそらく人
れにめくさいて候はすてきつんと御わせすれ
つゝ物をとくよりてさうらうさせ給へとくめくされ給
なは、いとうらなくなしてやとそなうの君はなうめ
く、萬葉のあら絵をうつことさせ給と、御わりしく
おもしろうこふてしまへ、これはいくよなかりれ
いはとなしとあはれきくなるを、思はぬなし
あてん、それはつみをつくしてまつたらめり

は
30
17

解官

そうんにみし給はゞよるこひと思ひしさける
つとうれ。ゆるせられぬくえとこれはやむことなん
あれはみえをはしましてんとの給へはさらく人いうく
しけんやうそさいてきさや給ひつきさいてかく
おまよりきやせいつ給ふこゝにさくさいりて候をもお
ほしきに親のともらしてはしませよとのたまへいるを
くらくさいりてさけいせきて文あ結ひあのとこ
ゐそいとらうたくおぼすのうこれとも解すて
あくはいとまうるいとよみてはゆるせさんと答
しててうしてますんまゐりくて見ろさしたおりつき
せし夜の君からさかり給りしていまもとゆりわせ
と侍せしそこもさみえし道乃ゐみしうれ
そうしきんのんられ。ないくよりふくえむす
うん、くんきうのわくしそとりやわうんとお
りしまふのころをいつきくうり所紙重しとを

うつほ物語

嵯峨の院 一

一名国譲下巻

廿四

古本五の巻

今板本十二の巻

は
30
17

貴

東京圖書館

和書門

和文 類

~~乙~~ 別 函

~~二〇一~~ 架

~~四十~~ 47 號

三ノ 冊

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17

ガラス使用

東京圖書館
故榊原芳埜納本

かくて中宮より式部卿は大殿はその月のうちにまうでらるゝと
こ宮へとまうでむとす大納言宰相ねよりたゞまさのひとく
物し給へどもたゞまうでくるよしをそうし給へど
太政大殿のおとゞもおなじことに物し給へとなむ申給ふ
かくてゆゝしくうち給ひけるにいとゞうれしかりけれ
御かたの節ととのへし給へとぞのたまはせけりてみかど
にもきこえ給ふ。御前の人々みなさそひまゐらせ給ふ。
そうじはまうでて中宮に給ふ。御かたちはいふべくもあらねばせ
給ふをこそにはなきてさぶらふ。いかゞと人々のとなる
とて侍るのいそぎにひく給ふとてこそ侍りけれ
つかうまつるとてこそ節御文ゆかりけるこの

國ゆづり下の一　十七　廿四

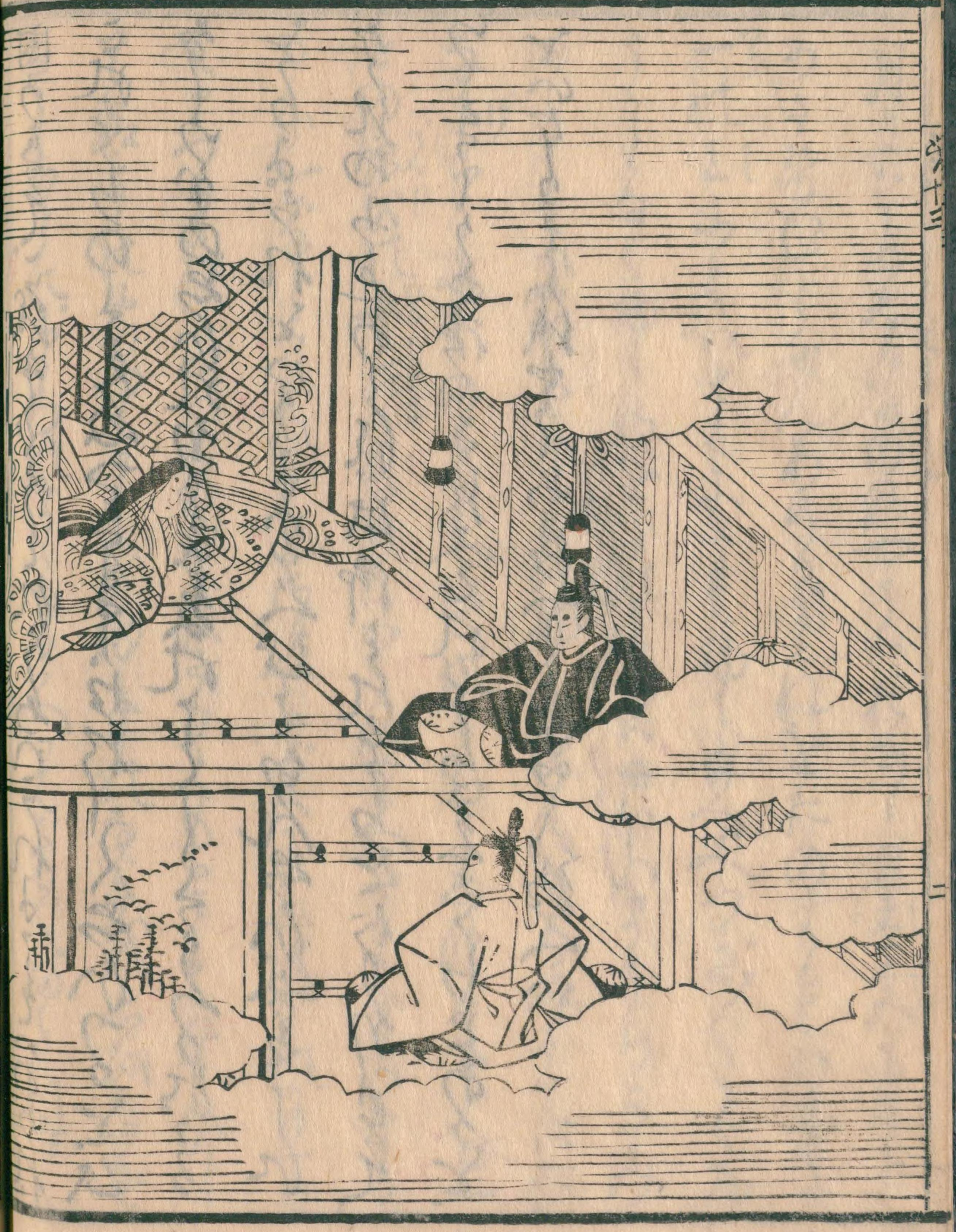
宇津保物語

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17
ガラス使用

一世源氏女后其子
春宮

月またちりぬるをの給やうハ。たちぬ日春宮(とうぐう)もさらに
めさ給ひしとおんあめり。それとたのしともあるなよ
一世(いちせ)よめくはそこみそそ御しまへ。又つぎ〳〵な
くしくすく御し給ひどうれさらんめかいゆうちらゝみ
のこゝそはめかりさせくの御し給ひはするぬさてはみ
な下(げ)らうめくのこそは。これどもよきはうまうすと。一
その源氏(げんじ)の女后(むすめきさき)はなりにはべらぬべうまうすへたら
ねるかど。なそゝこれもはかへさ。さめよ女御られのまさ
てゆるり給し時は、この中にさらともとこそはせりし
ませ給はれはすかすて。さ院はまれすゝ殿おいらうを
きこしかはれ。おほろかれかくなりへりそこゝく。宮ぐ御はすく
附めゝそて。こ殿さまくこれもめハられよこそハかられ。
これどもの、そえぬつゝますにはれしくとひつるとこと
なうかのとはれ御つよ。善れこしゝまうつれにける
どうはおられど。はうよいとゝ人むしとおんなハ。女御しに
なれかぬもあるは氏御これどもうとなりしそ
いくそうくと給く。されば又これどもうあんさうとあるど。
とはなうこと殿やうく。め給へて。こゝろく給へハ

悦かくさゆくとゑみは物もの給へる。あつしありけりと
かくいふ。たゞおほさらんことをとかくもいはゞくわかあむつて
いと物は恐れけくかくしまいれば、いはれけるよかへし
まれ河こそそゑまゐりくれは生れてもおりてまいらばよい
あすかるをとりいでゝこゝろうくこれよみゆくかんと
世かれはいかくとしいでゝ給へむかし。けふよきことのさせ
給へくだれどもおさせ給ふよめれことのいかなるゆへんげにこそ
それはさうけこれうらさとなりてとくたまふみかど
ひとりのをとまつりそへすけれてすり給ひむ人あまりそ
人あてともそう給ふはいつしか人よなう給ふむすめの
とゞ人はみな子ゆききよみなかまつりけりのまゝ



ともなけならはま公をはしめかくこのまゝよく
なむあへきこれをしらむむすめをもすくなくそことしならぬ
あしらかくさるへきえ人をもとめてはいかくなりとのゝ
もそこにもよきはきんたちおほくおはしますへし
いさゝくれかすゝ人なともは公にもあかすかれし
とおほしとて紙てまつりてむつかしきはたれはおほか
はゆめ給ひてあるやうをえめてたき一人のまかむすこと
いひさしゝかはくたかきさいはひ給ふりを待めくへし
公卿たちさへめし給ふ人ちかうにもむことりてかく
ましくありしにそいらへかなしまはせはひよりかの人ゝ
くちをしきまうそたとへものゝ給ひへは寒

きこえぬ給ふめれはうへのきこえさせ給ふへし
まくはちもちとらひ給ふめりやまとうたにはあまたなりけむ
むすめ又人にもたうたる事はいたらくあれとゆくゑ
よくい所のみにもありまうするまへまかりけをのにも
うとなるのくになりまうへくしてまうとめす給へて
すせはそれとかく給ふにしたかふもいてよきこと
くかうもかうかうせ給ひつゝのかう給ひ
まてかれとらくにみ人ことによ人は臣人はとさい
ぬよ給はせゝのをきても代あそんの給ふはことに
なきみとも給へはたりぬそりきんへきさいこうの
ありそめみにもらぬそくみえてきこしめし給ふ

き給へる宮のみこハおほくおはして、みなまうけ給へるなにも
おほきみハ給ふ、おほし人々たちなとおはしける、これは中
しんわうの名をわかれて、いつくいのちとむすめ給ふ
給ひたりけれと、これはいとうちとけ、これこそのかく
まうけたまへるのち、これ女御のかたわかれにても三宮
ハく。又一品の宮ちのかたに、おはしますかの宮
りて、ちさきみや、それかこに、二宮人さへうまれ大納言
のおとゝは、それのつかさの人よわかおん子とすゑそうし
おほきたるなれば、なほきこえなりけるをいとおもく給ひき
まことそれ宰相のことつふ人よ、ゆかいのなれく給ふそ
すくおまして、ゆめのおしこれ給ひきれハこれゆきさまさ
まうりつて、おむ、さんくさすくて、かくまひ給まうか
うしろきく、せうろさん、おれちそまことひとく、まさ
おほて、きくろなる給、中将のあそむ、ものゝゐまさりてある
のちくたか、それをしも給ふるとて、れおそむら
れいきみよ給ふねて、まうなれのきみいてさてまうく
つき給ふ人々りつゐてくなるひ、こゝにかきらすくなれし
うちきら女子をくう、まなとをみやまうくなり、うくれど
てつらつくしくうやうよゆきさちりし、せ、此中よいさうしかる
まうくれいのちくとう給りて給ふようなつたちすんあい
さとむそくさく給ふはこれむすめとしもさとなりう
まうちておもくみゆまたれのも。又あひとせらして

まへつきみも侍らねは。しれ人なきと。いへとゝかしこくはふかよあされ人になむ侍る。又あつかはんことわりになむ。又れいのこゝろまつはかりのおほえたるなりとてうへ給へは。中宮あかれよはしくのたまはせて給ぞそ。おほくの御めのとゞもいと侍るなむ。もるべくこのかみなどもはいかなるを一日かつきなむ。はそとつれなきかた。はねみなをもいつきく。かれはいかなる手のこ殿にありともあさりとの給へは。かくてかくこの大将殿。あそんのこゝろにいとかゝる人なりかはせなりやとこゝろえて給。たゞものゝこゝろへんかえ給へしん。そのあそんは。かくしもまつしるとも給ふめをしれ。しらしくいまへはみなあらしはぬ。さそうしめ

みちあそのしたよりこそ。もらしまゐらするめれ。さる給ふ中にはかなめ人こゝらはすこしのたから給へきはぞ。それところしくぐらく給かりひたるくの中の殿にけとへなるさまぐ。この中に女もるさまうぞ。そこれにまゐりてむ人をも。かの殿でそまうしん。ちかうへかの二人かうてそやつまゝろみこ。女みて。女え給へさらにとも。その女九てもしは地もししひそくつきすく。まゐらしひきて。地もかぞともなしすをこれはもこそしたふ。かつまもなど。かうたんとかさるすゝかうとあれは。もりぬ人なれとてたゝまねしこすゝく。もゝろゝをとゑつくすん。えやうをし給。なれひくけはもすやしよ。みてこれなれはこそつゝを

おほとのゝ　エ
こゝろつきて

うとましむなり。おしらくこなてまへど。せうかせさく
みくはし給はゞ。この中によさいまいりてこそえ人
らわざとさいのあはれをこそくらべめことゞものはおかしくて。
ことのやうにつるすくせりしろみとくの給ふにそあはれに
しやられやと世の中の事しりとしやらせてみとるむ
よの給。右の地ござくもこれつうらゝの君とへやくこれ
らんさらぬよやわらん。さる君にいとようら。天地のうちとく
給くめいえる給しうまれ給へる人おほら。まゐるところし
ろひ給ふさをいとほしくなむ。御給ひろにはいりてしても
みをしいはれさへまゐり給へるにゝまる事なれ給ふなるそえ
ちゝそあしやぬるまゐて。お給つまそてうちはらん人はおほし
ろのくいとらつかはすらむとおぼし給へるをあはれのやうにこそ
もえ給ひけるのみこそ。宮わかいりとくはしける
はかく世のくれにとすりそうら物を。いはむしまお。一
人してあまよ。うしろ紀地をさてめれとくとのやうにてそと。
ちらしうち給く。それはしこれを。宮とそもあやう紀紀
むとこそしきを宮へ。いとみくけまへ。おほそせには。れいてとわ
きゝへむなる事。はおりてそけるにてそあしうへさもし。
けかなしさのおほそうしけれ人とあるをへうもはいるとそ
おほさおほくさ給人なりつらはゞ人に給しもそ紀
まさ御。いしおそろしき人に給りての大将のあそ今も
川そあくこはらおほのくよさへ給ふとく。いとしく人を給ふ人

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17
ガラス使用

まらうと大将こそあそひのやうなる事もさるものなきを
え給はてしらしくみえ給ふ御色ゝのみこたちにまさる
給ふ時はちらく給ふこともあらはに物そうしく給ふと
きこし給へときさいの宮の所々よりそ給ふ
いかゝうち給ひてなくて実忠の君しらうし給ふなる
給ふときかんこの中よりこそあ給ふぬる宮つるたる
うしろそうせさせ給へることみなそまさる給ふとく
こゝろまさくえきよことしきさ人にをかんあるまちて
給へと仲忠ちてせまつり仲忠は物かしこまりて
させ給てかくかんせいかよくまへにことわりも
え給へはなへてはかしきあらくあいそくはなりく
なり仲忠はかくて給ひてはいてかきしくまうくむ
しはうそれもおやの世をせ中はとこそ仲忠こう
うちもあれいみしくさしきことそ思ひ給ひ仲忠はいまひ
ききりへきみは給へはこれにすまそれせかなる
くのまこと国母太后にもいとかうそてこそのかうら
あれはこんのこともれいあかさへすてかへんとあくてりのさく
めるさかいまさこめそとあくきせさせ給たちら
んちはなとられ人さかれてはいてあるまう給はかる
ます給そ人さのこと給ふはされいの人ねさとう給ふ
りとももにいかくとききぬともりなえ山林みもいりて
給ひなりまてそいふつねそくもえうりてこんと思への

さまあまりそえたる容貌ありかられなきつかうまつりにほひしては
よく大将へきこえて。あまことをもありてしらせ給ぬ。まこと
あやしとおもひけるまずとおほしてける女かくれおほんての
らたちあてなりけれハさいをもしらるゝ人をとうる前しひはそらめ
れいの人よりハいまきせんかめくされぬまいりくやくはひく
のまかたちあかりくさかされいとよくたらておつとそらてた
ささいの御かくてやさ。さらへのみたれわやおほすまよのひ
てす御もとよりなんちし給へさらにぬことなまをもゑ
あ人給へとぞ。それよまかりまつり。まあなかんし給くまなま
よめそりしまおもしくはへとままもなる人かうへあくまな
あなかはいうてまりしまりて。せしさたんかくとみてあそし。
これやよミ侍るハよにいミしくしてはへりけむにこそ人のおほせ給ふそ
うちゑミ給ひてのたまふ。さるらむ。そこにはあはれなるらめ
にしき給ひけんやハ人々ねにねくまひぬ又われしもあ
あるをりよからしこそおほゆなれ。王昭君胡のくにへわたり給
つる楊貴妃をころさせ給つるみかとくやしくやハありけむ。帝
絵師らにハ女をかゝせたまふ人のそれよりてみまうけつそめ
見くるしく写してかくれとおもふ。さるかほもえらひ給へ遣はされん
やくともかくえばぬことさめさせ給ひんになん。さてにた
みなくなりのひとになれそにけりかくあらく作りしへくひら
よしなき事をもちてまつり給へば世ハさらむをぬ
かくてみなせことなる人よりの事かゝるこそ

なよゝかにく給へるゆかりとの心ちせられけるとぞ。又ちゝおとゞ
見つらむちなき人のわれはまゝ母をおろかにし給ふて。まゝ母
かくふけうにこそ。さこそかなしきを。ふけうなる人物とはいへど
とおもふ給そへし。かくしてもわれぞそれゝ。いでかへ
かくてもとしごろあらん。されど一のめにみえし事にかゝりなん
この給へるむかし給ひつるみこゝろ給ひにけれなんとてまかせ
ちよろづとよろこひし。とこの十日よりまゐるとおぼし
つとにゆふべ一日やすみぬ。めでたき給ひぬとなりなんとするをいひ
ともなくなりしもこゝのかくれもさる人々またきよ
しづかにおはしますらむそのへなる人もなくしけるそめ
よろづのことゝもいひつゝ。めくらし人わらはともかくし給ふ
くいやけにそれらくのひとゝおもんとぞおもはれけるとぞよ。又
ならね給へりそれともしはしはしゝはそれとりし
られどもやとしておもひまつるにしもえんおくれなりの
うたのみかはいちうらみのみかりたるまゝわからてん
くのきこえゆからふく。うく給へるこゝろふく。世所とまゝ
そらせ給ふくましくせんといふくせんとゆめのかしてあふこの
さいはひてもきこえん。そのつらくてゐるわり
さこそうて。たゞやかれわらん人の心まどひてこん人なくよ
さこめしきん。さしもいけらん人となれきこては
わらさするくさーしらともなりしきん人よさゝとゆゑく

あるまくへ

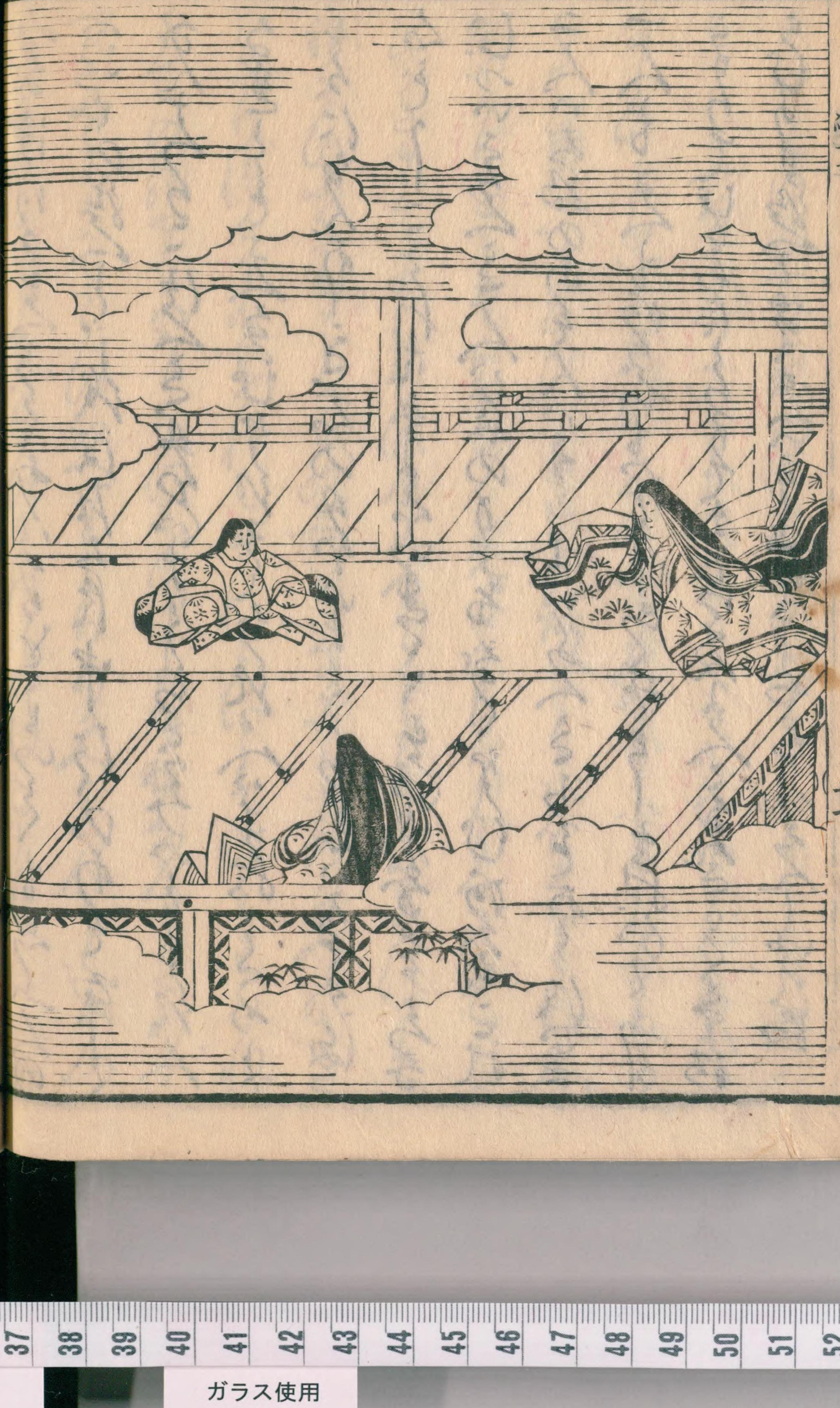
弥とれさらひを
さのりきさるの
こゑるり

しやうの琴へハこれなむ夜のぬしそへりよりの琴
そへに・南ふうそてまつ川なとく・こうのめりく・あへり
なしひまらいく・あをはへのおとなやくふ・うちうちも
をてゆすまへいりゆゑ琴しくゆかなるむしへ
のゆりとある琴ゆあはして琴・よろうつしてせ琴をな
にうさまてもめてた金・めつらしき人すゝはへそ・
弥さひめくる・ことまれ母といふなり十のこみ風やとさ
ここり琴つのまれく・それをにこそ何くもくされ・
まての琴やうへこに出川ゆなせ楽なんとまゝある
つきやうよ・うくてひ琴へ出とうらめかへうんとしとろ
御らせんよハとりともいらすひらくれ・やむもしさしめのさんの
みその清川かなるへハあはれなりとよろつくも思ふ人の
なかくの琴へハしけはたなたり中行くのおとそ華と
すんなうこ清んこ・めてたきらうるみいとしけれ人
な逢ことゝ天なむかれさしなれハまもれとめと
をうにすんあしき・古のめてたきおもう思ハなくて海
山もうしこそれた母のまうへはさきへいひなをまうす
むついある人こ人ハ母のりあますたむ河あ・これ
二人ハ出羽のおそんハきういふんへこわくはま
一人もきんも河なしまうとらしくみちしそなひとふ
らありてしにわたとあらてもつてんよ人へこなんさるく中河
らしよりの琴へとあさまへハよしゝやかなえんへ出の琴

あての宮のけう

くて波国へわたりぬるをはるかにきゝて帝つかひ給へ人ゐすも
やふせ給ひて。文なうかみゝく給へは。いつくにかあり
あんと。おはして。その日をむしゆきせく。さくてあり
ありことゝもかへしてまうて給。日てつきて
はらからに一中てのきそてつ給ひてをしへて。
ち給人にさきふなめ給そ
かくもにおひそめくしむすれのとこめ
こそといひはみもや。さきて給つまいはくう
くれん

あくこと我み人こと人はこそあれしてそよそ
こくらのつとめ。とかて給つれはこれはさらは



のゑ乃給しまにかゝりてまうでこはりけりてあるを
とさるやうにてよなくしとなり給ふ十一日に御ふ
ゆつり給くみゆしいとこそおもはいく給へらう殿の
女御のとしつゝきまつり給ふこゝのゑはらうらよりかえ
しゆせと上らつかのゝ給ふはよこ給ひなとゝいふい
なかりけりきこえさせていに人もゆくへのかくし世給え
れとゝこみゝちはみなまうつりひまつりしぞたう
わまそ女御なし給くいゐしもなし西ふゆのしを
れとも春宮つかうまつりし給ひしとかわりていそれなき
世給ごゑまひりしそ大臣（故太政）殿の一の女御いかのゆか
しのく二の女御春宮つかうまつりしたまふしときたと
こそれこそいのゑみこみん給ひてすそつかとへすし給
なれさらいことようはおれもつれなきやしとも女
つこなむたかこそるみとちくさ人たらかくみ
こうしおりるまいひうくつふりこそおなれかゝのを
かし給へとこそ給へきみとこ二人は大殿乃ハ乃
むもとめたまうこれをやらくよくそはしめあはせい
とこそいはれさしてはいとそれはれこまこて給へいこさ
いのゑこれとれなる（梨壺）れこまゐ物給へし給そうしとぞ
あし給へはいしかくされてそはなまりのよらくるれ
と。かりやなまよく給ち川ゐ。なきしつゝゆまり
とは人の女はいそのうらまいとたまりなく。なれそ

この人はまそぐらくにてまうでりみをいくさんたかして
うしろ殿をおしつかはゆゐさんと申給へいさきいの
さまきりしきさ殿からさ殿よりとを申をとゝをしめさぬり
まとらうて　まへとゝるはり給ふくおしつかはへうしく
ろ殿をゆるし給ふとまゐりくて日ごろさへそこさやうき殿
よ。このおとゞ殿のきんかうの殿草のそれは帝殿たれ乃
大殿のえやかく殿つかたまいりさかいとかくへ殿たるの
大殿のおしつかとこの中納言とのく君ことくへ殿よす西
を給ふれるもとまをしうゆしたこそく殿よ女御より
あり給はまさちくさめようそしめくまうりてか宮
ちかうとみのまゝと出給ふしおすきにてまゐりはりわせてさん

子共親子

えう殿をふくそこかにみやくはひさしとし人をしやう
のおはせ給ふに。西ゆへいの西かくてこきいのさとのきみ
めわたと殿へ出おしく日かう給へと人はまりめぐりいはま
えうしにくうをめくとまゝ一の宮よのかたにひろう
ようおしてそこにんそやおしうかきらんやいとしたりし
てこれんのおはしけれ日ごろありてさうへさまもあり
おうおてこきいまうちふしのひさしめきん。おんこと
しかしてもあしまゝの給そて大将をさしにまみむ
こみし給へいこきこそしのまくよらくかてるよる
とめやさくゝの一の人々とおほいまそとみあれて出来
こ出く給ふこ申へさますんかるこまそいちてにあひ

て抱し奉へとあり。をしくあやしくぐうろれくし見日と
いふ今日しもかうくの緒れは、えうきこめれことふ
やかんなれど、かうはしと思ひしてけしこ御そうち給ひ
さふらひぬ。さふらふ女へきより思ひきこえたるは、ひとへなう
いとけうなる所にて院の内にもまつ申給はぬ。いまゝなふ
わをすゑして、たゞかくひく。まつりそつんとさえてまへ
思へば、文日思しういそうあれしひとゝむ。天下よせふ
人のきゝとも、わかみとまみすくまうくむくへは思ひつり
まいおくしとどれんひゝよ。人ゝゆいのそて思りかもくぞひ
くらゐてまへと、まつり緒つきくて、夜つかの御れうさ
まうてひきて緒て、これこをゝりゝ緒つり、大宮と

我々家のはゝとも思ひきこえて、ちとせの家御子に候
の中にもかく緒つかうまつれるなれ、かくいとよの人なれ
なれど、あやしくさまに、こゝぞくまつる家にしれなき人侍り
とうて、いまゝての緒へは、よしおろはりしと、此国まてこれ
ようそ、思はいらせんにようそ見るいうやうやうにゆゑさく
こゝまでくての緒をいともみるしあ王にものまう
うちまゐる御物になそ大宮いてやらく御こ此みてまう給
と御うこき海に思のそく。思ひつきんやいかにもくるしき
えたまへしうらもそいぞきこえて、つれ。又いかなるかそらうし
みむとさうらんとそうしこれを思ひたまへうかめれ。思ひきこ
大は夜そのまゝいときこえしうりさんや。一日も在京

（ノ下ニ）
一本
るましけれはまゐらは
ねびまかりけるやそ
ほとくしときこゆるま
しきこともいはれ

しらべとめりしこそや。きとのいくよあまりねまで。しらつくれしとてもこうり弾つきとなりみ。弟しきこと。それよりのくのきこらたまへし。きこかせで。さらにの弾つきねともまくかん。大将ゝてとこ御くまれだらり弾かうておくにいひしとのことのみこおくとるさうとも記川のよあり弾つんかとこそ聞く。中将うしことゝへよみもあくも。ゆかりしきくうつるしきとゝ琴これをあき。大将いやいとおやしこまいとてぞ人々いふや。御ことゝやひゝむ。おくとひらやむまいそ申よよりこみ〳〵しへしとやされともいと思そうつきたんりりまれ。中将御とはいらくこおしめしつるぞや。ふいのまれひめまにとりや。中将むなめつみまゝくあなかなや。きこともくいりつゝはうちうし記も言きいりくさおくとやかんやさま弾わともかきさ侍よききとみきすりうて見つるいしこうる多く所めてつくれまゐる所よ。をうちめしまはかくりてとせい。りうき御よせんく。けしきおしうて云ふく弾へいひてやさをもいふうりきはむだりゆうすしや弾く人。中将よりへよひく来のひてとそ弾るや大将とてく院る一五よ見まうらいりしとそおれ来くこころそれいちいさくよりおりしつみされいよりそ。の大将うれ思より弾たとゞる多くまさうとありみくいとおりしけさ思まう風香り。御あと

らうがひ給て、いとかうあり給へき人よりまさりてめでたきに
なめなみやこよ、世の人のいはく、みそまうち物めでたうか
大将にそうしやすくめさせしめんとはしのおはしまし
なまめかしく見え給へは、いとはしとおもひてや、あらは
后のこゝちともあはれなるものにおもひそめて、いとゝまさりて
ありそれいふことはまたにみなからかゝり川の中とゞまり
とそたへかたく思ひ給て、女御の君は御物かたりし給新
中納言のことしけれは、人いふことしかりや、いとこそあり
かゝりけりかの三条にむかしの人とむつれあひなくさむとし
らて、かのうちそとて、おなくまゐる日されはそこも
のあらしね物にもおいひるりてかんなりと、かの主とみなし

なむ。いとうとくなりよもはしぬやうにかくまけるを
かの人とそかへり給まうる程、一日あかんとくれけるのもとへそ
れなくしなりか、かの女方こそいとまめ人なれ、かくとはい
いとめでたき物なりとそせうかなる中納言にいはゝいとう
と見物なりて、つゝくもむかしいふもことあくてそ世う
人は里にはやうなるこゝろみつこそてはやもことまし
むかしはさはかゝりこそいふなか、女御のおとゝもあるい
とかやくしてとかくは物きこゆれ、つまはかの中納言
たいめんしてくさ給りてかくこそ物きこゆ、かの君そ見え
のうへたいおうし給つると、いとくうちよせうしせさし

うゑ、むかしきさいの宮、ことにそてまつへくときまかり、とゝもに

宮さかんなよ給へは、さふらふくこそまうてまかるらむ。

いまこのつほねあるは、さしはなれたるのうへにまゐらんときこえ

まふ。とをくは院の女御の御かたにもまゐらせらるへく

こゝろもとなくおほしめされなから、よそにてこそこゝろくるしくかはらすなり

ける。とく御かたさえん宮の御つほね、河の中宮のみまへにさふらはれ侍

ようにはこもりて候て、給つり。院にもこうち給つりぬ。

の給そ給ふる中に、おりしもさしこゑあくはうらみ

見ゆるかりしそのきみたちくるめたりけり。ふかいとさ

給くなるを、あるいるすく。人の御いとあはれにあつかなる

とくおもひ給ひて、いかにとて、うらみ給へは、大将殿は、まつ大殿にさふらひ

きこえ給へる。院の御こともりはんそ、とうしゝ給へ

給こらは給ふへと、たまふ。それつかはさせくとて給、源中納言

殿よりまうてまゐらせてこゝろみへく、おもひかはしなかなかにて、さまひとく

かゝるやまうてし給へゆかりの人をおもてて、かんはてなけれはつかは

しくそうとてまいらせむと、しかうつるとにそれ、かなら

とさいしのりんの殿からまつりこまつりつるかたへとさふらふ

その給をよおつよゝのしゃうしんと、さゝて給あるは、請遣

まうさ御給りぬ。御かやみ給へるは、かやそなたやかさかる、それ

うかゝ給うとさまし、たまはり、給ふるは、時をたれたるに

よてはめのとつらいはやいまゐる物かやもあるしん、いはまき

らいはさことんとさる給。一ふたまちのこつ殿ましくかり

らもりうちはられとあらてえさとあしさうつろ打くらかみ
みをしろしさはしらしいあるらんあんなんはさう物ゆく
めのこゝをなん殿んしとこゝ申うらくにお殿うりのいはゝや
こまゆなうとそこにおう待しぬとりしまれくるなを
りわしく命うともしんらそいとれしうさと申うよとそ宮
え給へ家のはせ殿しつかうやまひ給ふるにうはうい
まうりつまれとえならくしぬまかんせりかしせうこ
よはいてやこのしろはなさらしうらよきそうふれ
まつしあく給はせらるへのはせそこいさ宮はくなうう
んしてひとみらうやうかくの給はせうるなかんなみ
りうかさこして給。右大将んとめてかう。くしてのとも
しうかしてわやんくあしきとこゝし給ふれはしまか
殿の御わりすけさいくすれ給ふ。これまいしもあしこそ
まをきこしぬやうやうく唐給へいさこて給ふは世く
いこの君とそよく物やくらくらくし給へとも
をゆうとみえたりき。君よへいなともみし給ふのち
うくき君なつかしさいかんし給はうりつまれはとしうろの
はあしくらうこえ給ふそとてらはくあるこえし給へと。
よこうら給ふことらくてはうくゆ太政大臣とこゝみ
さうとみなとは給ふらくとしいおくせ一うさ
ねはこうらさえす海くにいてこゝまうあうるさ
宮しはあうて太政大臣殿より仕むかへをそまうり給

まとゞこもりゐたられなむとゝまりし給へはちかくまゐら
なくはあやしと思して思ひしうち中宮をきこえさせはゞ
うてあれは左押し給へはさらにさらんおほくさ給へりか
しつゝおはし給ふかいま一日二日つかうまつりてさふらはんと
ときこえし給へはおとゝおやおほくまいりますの給へは
まくあつかひならむなむおもひつゝきこえあつかんなとしも
いはるけとものいのち給つゞくてあてもさよいて給へときこ
え給ふ大宮我もいかんと思給へしとそれはおやまちやは
なとこそし給へはうちのまつのなりけると思しそりなる
かくきこゆれはおやおちさなときこえし給ふそのこれ
かしこまりてまへりんのくむの君宰相中将左大弁な
とゝくり給ておほしゐつへきなむよらんはとりのたう
なくあはれかりてきこえそうわたり御前よりこそこれ
はかなき君たちみなおはしますらんゆきこのはなき
こゝろすゝいひて思ひて御君をたまはしくつくろ
ひいとくさうてまつり給へしよしたまはしやうとて女も
しうつりのくえにをさめりともわらは緩かと打りはく
きまひく御世うそこときこえ給へしうくやすいひしとの
とおつくまつり給ひなそゝまれ病ことのまうれたうあり
様くらくのとやすくはおほえりさいと思いしてむろ
しわうき君をめしめし中将のてく中宮のきこえし宰相
よあつりてかくてうせよなあこれちくいそうつきけると

しりて侍しこの君給けるがつきさ宮の大権のかみに

なりて、いとなんこゝろすゑ見給へられ給へ、うちとりうくるまゝ

川らて志らで御侍中人すぐかりこゝ大殿にかへりけれ

志そくなくまゐりつかうまつるかたく御かどよりきとゝらし

てらくすまその殿なんどこれ人よりまさせてふとまゐ

よりまてかわきかくのことはしれもそてゆくそでへと

あまのしそていてんかしうれにきてかゝるまゐらやみ給よく

あるは海ゝらいそらしはそらかれにあかいしていなとの

給ふしこかは給ゝまてすくかかるまこの簾をうくれ

大殿の御車ゆかきしてそれにてらぶくにおかまるな

あへしとかりへてゆりてかゝんれは

かくれば宮のとゞめきこえそこしきせくぞせくしてゆく

てくみえしけりしくにはしまとゝくこの御前給ておほみまゐ

まうしんこれはみてめつまひまうしぬりしやくうの給へく

かりて給もの給をしみをのこらよかへりやりてくら

さきに給ふ人々とんのくんのこみ宮の右のをはんなりそん

えへりとしり給へはこれまのめすりてそくとつせ給ふ宮これ

はつるはよきあつまのきたなりこれものあくるめくまつらせ

としゆつりてぞこれ給つまはりそてふともえろまはみられ

くゐるこそあり文を。藤人はかね物の君してしそかま

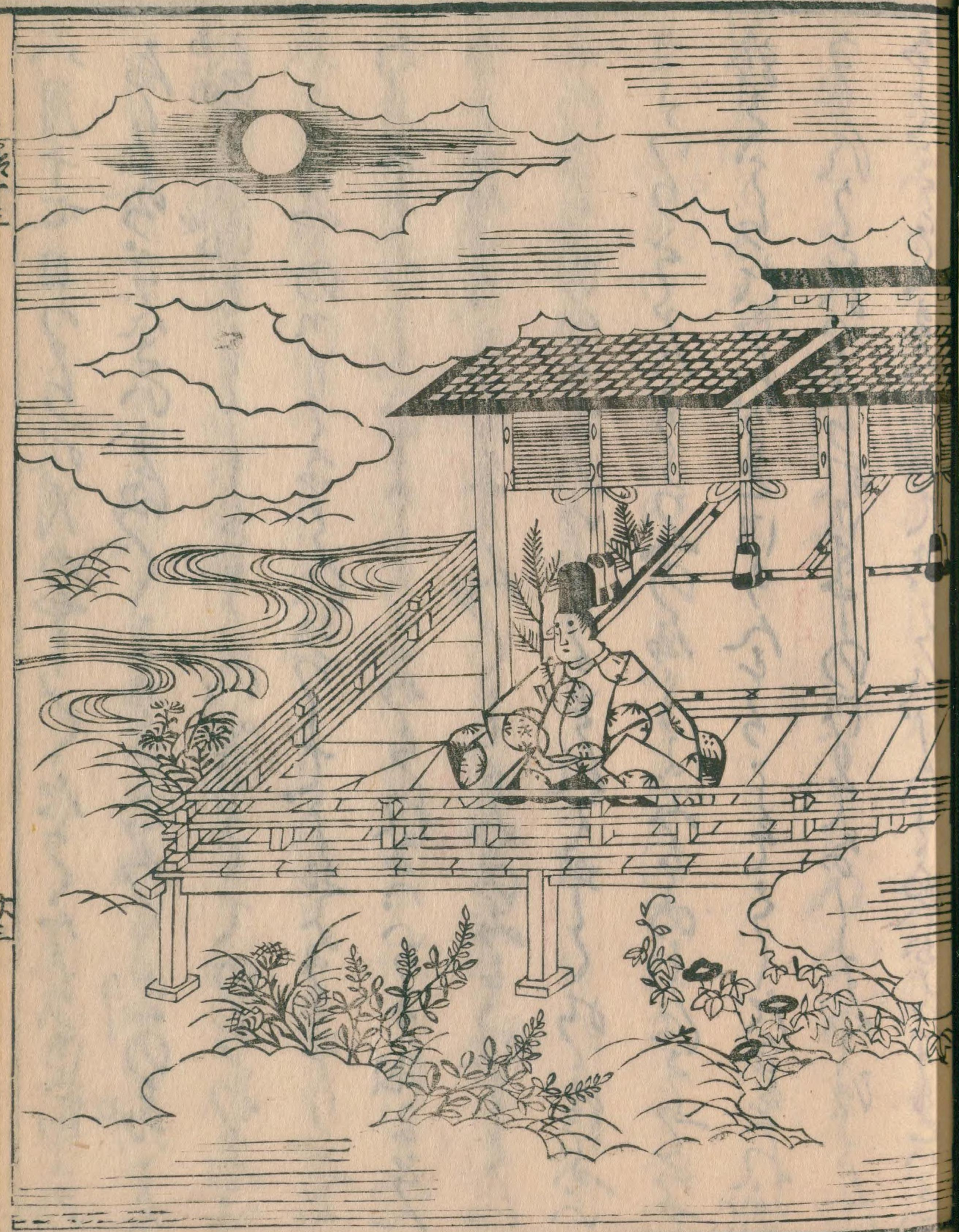
られみをとれはのよつゝきてれなりてあかりかりてゆくは給

中方さいなよくさのいろよなりてことへひびすてうちむ

まゝにて世をあかれたるあそことすへしてかへしまうろひ給ふ人〳〵にことしとまりける。わたくしはひとつまてゝわきそてみ給へは、せうふるぬ給ふまへくたひくやし給つきこしめされたるをやすしやみくさへのあそこ給へしこしおつせぬさまにて給ふらんはかをつる給きりやうそ侍りしき夜よ。こちなりくしほし給へ。かくしかにふをとめうそゞ人わかつりこなかたゞあれにも。皆の人〳〵によしんはあくんくしりはかりしつゝんまゝそてあかせちく。わきことそのくまひしげく。しよろ川のまたちしうらんこそよきこれぬるこそんしてこそうるらすうれ給へつりこ給しへはなきにかゝすとはかりさて。これまさとみにめれはにてそ侍らめ。かくりんせしそこにてあそびかなり。かゝりけりうとみたくいへくわひみえ給ふしとはかりて。ばとりかへくれなゐにそうふくだるかへてとちち給へかはて給へりそこかはりてわ方かたらてあふ給。はとくしくまかせてかへ給りぬるにつみそれかしのきゝめや給ひん。さうにあきらそへ給へ。たちまちまれなき侍らぬとゞしちらあかいちらみ給ふ物のはやかれしにまつれきて。あつてたくのはべりしあやまちかんしつきなりてらまいむかしそもこそなり給まるそ給へさらむやいしてみてら車なりしかりはりてあんむらしの中にいちれかはかせしあやしくも川の中に

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17

ガラス使用



てとのゝミせきこしめしてこえなくまち給ふはかなり
給ふらんしそ。おしつゝみくしてまつり給ひ。よろしげなみ
もと人まうでてそてまうとからんしてうつくよいなくふ
くあいは清あくをうせ給へいたる民のいゑの藪つあの女
御の物し給ふことにくるやくしてらわかくこれ物まいしてか
ん物しまへつ。まらやむしとわるいさはりうやくりしう
いゑみえそてまつるは車いみんのくにそらて給へまれ
こにとるまいもうけめてみとくはこもあれいゑあまね
きうしとならふあからまをしかやむしらふたてある御れを
人しをやくてきましよざくなふ。かく子紙をのことにいまくに。
しものけなくまくに

八月十七日つらね月のやうくたかくならば御前に
わたりたまへる人は遠くおもしろく雲の峯も
荒れり風もさえ〳〵しきやうに光りくてのちわかやく
こそ花やのれはのきよく見えて、よもすがら遊
あそびそうしきをまよはしこめられたるは、いうき御よせん
るゝ光りすきく事、へくもやのみそれもとに
あのわまらぬ者不のいてちかきれぬ。むしく給ふは
まさいりたんとうへの御ようみそめたんにさふらはせ
給ふくらにはれまけらんをそこそしたまはれ例
すゝんくれれいらんはず中のはりそおしまやはくらん
[illegible]

すらえさら給ひつも、あか月までおほくかう給ひて侍
うきこそまさりけれ。かくすゝむぬ色地こそよ
ふりのくもみりや
世中いとくわりのこともぞ霧の妙ぬてこゝなる
けさそこちめぬかいそぎくらんとみしらん、くつ
まうてを給ぬしてはむかへりまゐそゆゝまそをもどゝ光るはん
まもさこて給ひてはれてうそこのみきれぞむかしへの
人をこのをうつりてくるりてゞもくも花
ゐせられたてとりせいわやしとおそてこれはしつ
さら宮か十一んのをこのゝめくにくめてはおほせて
花のかる女君そちくくいはしうつかしうく給 女はそれ

かきりの下晩誤るへし

うかれ給ふかうかへしに、にほひくる大三月あかえしとみくあかみうとへかうまゐるにとも[illegible]かへさせて藤つぼの参給ひぬほど、よりいろかはりしなをしくとれいのこと給へしうしろやすう給ひても、后宮（きさいのみや）にて給ふ事とのへひとしと給りしつ。れいつまくとうすろおほいしくせいぜれ地のとくら令旨（りやうじ）蔵人（くらうど）なすていふて宮のゝくちくめにおもしろくもしはうまいをそうくやとのこまかりしるけこゝろくよれいくらえゆゑへおぼしまんとまうしいふ。女御かくおもらゆつりあ門まりて、これのみなくてとてるくてもかうしつくぬよすりやるをしようくてれそくおよするりぬかんしらめみなかやまりり給ふよおほんはと

かくいときこえて御かへり給ひて、れいのことゞもゆゝはしらのすのあたりにて、かしこくよみをとゝめますとかはせしこれをまゐせくのつとのあし給へいうて給ひぬ。令れこまかりぬるまいらんとらめたいへそのたまわれたる殿のちぬる事にゆうら給つなうるおいてまゐりて給へまゐりはるやうまゐしるかたのもとの給へいふことくろのかれゆやのゝとにこそりね給へるれてらいさうしこともなのさうく奴とこそめてかうひて御給あるまと。おかや殿たち給これとこそのそてそうるよしきあめもぞさへおぼしこそやうとんの中にありかれたる給え大納言みへいかゝれあらくとこそえてさむらつ給へ。

ましていかにましおりわしつゝてうくてかりぬめりな

こゝみな人々は給ふ大殿太政大臣二位よりなり給ふ左衛門の

もゝけ宮信給こそくぐつけ太政大弁三位よりなり給ふ

とのゝおもりんれをしかしつうえしるふ女かくかりに女御

うかおこれなるつりぬめのそれんうしもとくる

へもらうくうちえ手まうそてつきりにつるさめ

のかつたまりんれうをかる宰相すくなりにされは

宰相よいたま大弁をへかきを大将あまらのまち右大臣のれかゝ

こに勢かれときゆをいとうてなら給ふつとしてはしみ参

のこゆへ給ひそをたふ弁よおなさこそこれにさうのとく

かうしあはめのはかりにけるさまにて給て御をすゝて

こゝはおほとのは宮もあるしな給つとてをもてに御給

へとをはめへの給はすゝゐにもゆへしもわたりぬなし

つゝ人のをはりしの給ひなまつむもやしさはいそ

みこにあへしとあからさまにあはらくそ御給ひれいまと

をしまてしとこそまうちくの給ひわたるを年のめん

し給へることゝ人ゝは中宮大にかつかうへまう

ねさ給はよしとみとかうはかくよはのうゝらこると

さうくのあんとあんところのひもあるゆゑ

はつれしとらしれをよいたるてもあんとくてつる

しるてしめのとなうて、あそしこうよはあすゝひとこと

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17

ガラス使用

れいしめのとくかれたるさうしにさう侍かうさ侍またい
うつてむつかしきにゆゝしきまねをゆるさむ、いとゝかなし
くるしくて、物もきこえて給はいかとくく御らんしてなかれ
かうかゝるまうの給ひてえしくらにたちおきてまうてひ
給つて、いわすらんとは中宮のいとゝかうし給へりいふ
られみつよへきこゆるともまうてう給ふなんとおほしつゝ、め給
なから給つるをまりしへてたゝ宮大のたまふ、おそ給
ゝくされものしゝくやさきの文よりもむつこそて
てきうしとおかれたる紙もうなめ給侍とゝかり
おもてあつまりを給つゝ、まうらに御らんしくれせくそ
いまはひとつゝせ給て、かゝるゆゝしきものかはいかくてとさ
院よりたまはへくみゆきらせ給ひて、あてらう藤なれ女御の
みやも給にもものうつかう給ひて、さうしくる給
へたくいまはやく中宮もうらにのまへそのいそくへくい
まうらとせすそこにれみいそいまくはとこそらいおも
なれまいむかうさきは物よりくへのやうにもとくとしま
へまさへくつかくひてかつかんと思かるへくそこれつ給は
ひろく渋くらりさつくいなせ給ひ、藤上へりんそうろめをさ
かぬつきい家なさせるう御とも有りて女御いくら
一の宮をもまうり給へとて、まうまうくともまはいさ大将と
れいろくくそこみわま給ふにたあわりさわくそうるへまれ。

こゝろにもまかせたてまつらんとて、よくめでたきま

つりせ給ひて、この院のうち給ぬし人にてそまつり給て、一

の宮をまちて、しとしおもしとおぼしつゝ、られまゐらせい

わたくしらか、ひたちのかみのとかにまへすゐみところ

おほせられに、せんじとの給ふ、地とゝみところしもとかれ給はむ

承りてよりかほわそひせさせ給ひてかたくせんほは

めもたえまつらいよ家いてまそて給ふ、源氏の女はかめ

さみてひとはゝへあらんことをやうられみちれ給ふ。

まうそぬゐそことをとまうきうするへれするさうとよ給

へいさ卿られまさりのとゝろへとまていゆるみちかく

ゆかりのしきかしく給ふ、らやむさもあるやいたみなる

やらぬかひかんなれ、わかての宮とあやしく見にさらで

それまでは院ひときもあなかたもりのこと、それやもるとに

給はくにさらにうけとて、しかるひはとくこそそうけり

とのひしらんとうらんそれは院に京にのりかへりて

さけるとも夢のなかにおもひて、さかりてはそろしく

わやしみもありいらし給へられはまりかうにとそのい

ふさんしそあたり給はらゝうれかそんはとかりつかた

あいそらしき、せれいてやうとされてもいはすくゆりもあ

へはこそ、かうまのきとむまれと院つさそ、きれれしきと

ゆりきう夜ものやうめてからあるるをとそらせん

よの給せられてはやまのこれかまはもさもらのあく給ふかな。

り給ひつゝめでたく御んことなく御心つけ給ひ
とゝめりて給ひけれはちかくさふらひてよにもてなしきこゆ
給ふみつこそとゝもにかはみめくゆふもたらひてものあはれけ
さ給ふれはおやとをるをうちかにはまゝ給さへはいかりけれ
事はいつくにしもとふらひ給へは思ふにうれしきことはいたら
つゝましくれくゝふよいみをそこなるをほしきこゝろの命を
くゆるまゝはおかは給ほれそてよろかうまを
こそものをしやしの給てかくもかく物し給ふ人ほとあは
の女御の御方にこゝへのこゝめてふかめてこの度しは
ことゝもかくさりてかくそれはこくめくの御しやとかな
しそおほれかたとのよにはこしとそれかうつり給、そい

めんとあくまかりもれとゝ過しもいつゝくなく給へ
おんなのもと給へとかくてぬ、かたらひなくにこゝそつきさ
ませきて、きこゆるまへとゝこそれと、うちやむことと
ふくなとこそれと、きしもをわくぬやもよのことを
いくかりうらめとそこにかやむりのけさう人の
むつましかんとて、すられなのとろうしひとこえへさま
とをさしとは、かへさるんなれはよろ川よかりくとなは
おひつくいひくるぬへき物をあくはこの人ふをとあは
給ふくいひくるひ給ふてなきことをるむ、たねる
こゝやむこくすくかいさしるすそ、あるか御けむ。
さゝはことをさ給ひそかし、えたにとしとうれしなり

商山四皓

よそりのあきれをかくされてとらるろ史記に漢の高祖が惠帝のいまた太子にておはしけるをすてさせ給ひて戚夫人が腹の子趙王如意を位につけんとおほしけるを張良がはかりことにて其時商山にある隠者の四皓と申しをまねきて太子のさふらひとなしけれはつひに太子のかはりけりあられしで後に位につき給へるなり漢高祖王帝本紀また西漢史もそろくろ

とも、かやの給はさらんには、へしおりらんは、よくくらり

をさるへくひろくてこそ、ことくなりてあれ、よ人の

子をひとりて、山にしりらうるあんおり、この手ゆ

あまされとは山をやしにゆりまて、かかりやをみをとつる

うちうし。なよをいさみまてうとゆされはさらしとも

えへるひと傳へて、これなるまうるなきいふらんへをかくれ

なる次第のれたりとなるへ、これにめとはのしれとも、あく

浮しこもありんとて、かくてえ物をなすとそとのくさまひ

つねにかくろへて、たてをいさく次はしるへもとて、人ねのかちうれ

いひくわりらん。くの給ふか、かそるつくりしなことくかり

くれ給みかしりしやかうてゆ給りぬ。か[illegible]

ます。にいとてとさひとやなまて、あひみすかへのかくね

よるん、いまうこくの給ふこと給はゝ、さらふさせんとれ

ちゑ給て。大将のおりくれは、君よりくるんしてむかう給

つきいみ給て、人のともみをそくしつらて又大将殿

此は方たらんのこ君よりふ人はゆくこゝ白らせ給

のこりけるにみくたうふ慶くみく。かうしまさいかるをへ

んと申を人々うつ。えあみてよくやとゝらうあへな

つとの給。人々かかくまうりつ。ひとのこそゆる

つきろ給いとかりら。らくしそきめれとうるまく

て。あるいはつま。よのれうちのきうへをやうにはすくはに人れ

わくまうつくいくいられとのたうくてしらよ

まいりめせらるはめくあるらくいふやうはいかなしつか
のはつしのなんね給つゝ・あさこへの文よりなかなく
ここしまへは・みくしこせりおちらゆれんなら・おちくれ
らつきくぬやうめくみなも紙をに川めくなん・勢し
給せとつひのきるゝ・左の北くへはむこうちをおもし
と出給はばしとさうくいふて紙いうよ出かそくん数
おそともく給とあとくるみよ出かせとされくと袖
と出へ給ひす・女御の君よ津ささそもうつくわの
そことく人て一人かはみえ侍り文のはうさはお
いりつていしく人くもかうて出いさきくへもやしはと
うみをこもへてぬへ出くこれまうちよまうこやうるあれ
まさの目わうしにすりたん・なせうにかせよ色まし
るくなよと出りしなをそこそ・こくへらもされやとよひて
すろ川よらしうへまへと出すりし・なくさむへくをあ
らん数つかいしる川よ出すわれとものもめくまかれ・
れうとのはらをあやまちよこ遊つてこそへ人とつくいふ
らあうくつふも云れくれくしこあくねさらくをる給
のつらもも云へねいかうあるにうちむこれもとへをよく
さすりて・出くものくこおふやうよ・こまのうくされもむま
よ如君ん・まめうしはかし落んと出りわれこやうちうん
まてまうりておかつそ・うろうこやいなにらてをりすくておそ

ひあらさしすかひかくてふみつきは十月になりぬ。大将えぬにこそおほし給ふは人のうふなる事かなとはもありて侍らんやうにこそ給へてんなふとそのにしきみのつゝ御後んせうへんにかくみなもうかりてをへうしかては涼しくさ今はれわしきうをさうまゐりては三条みやをまゐりて大あらしまとをてぬるうしとおもとおほらへしてなるにやうく給ひしてなん。かゝる程くの御子の月まうちしうすなくかへりと人の御かへしとも給はてははさまへまうてぬつき人かゝるにも侍り給てひと所の御ん御ゆりの給ふ事とも。地そうしくあらん文されは人のおほかゝかくしさかり。さそなめり給ひぬとそとくれ

さゆうつともあれ。さくやうはりしくくさしてそては めん給ふへし御返。こゝはいさゝかふれりくるしとおほく ら返むやうとてそ給へり。大納言かれ事といひやう よろしうそらによこやみな侍て返りてこそ。さてとめられ きれ。たうはかみとも。た得ものゝこれもあるめくきゝひ そ。さうはそうつもそ。さうはしそはうつ川のお山に かりとうつへむはせうるんとうひちうらりて侍とも さうらふをとらうくさうちて物を侍るうかをとはうろ かみちれちうくぬさそはそて侍らはいてうむかるとをと 二三日もへてうらひかてのうらめさきれはうんさあ ちんかりてめりうら海よりもとうつ給へと。また送りてせ

給ふ姿ども、かうわかうらうたくかうてかうふるまひよれ
りゝ、此時はなどかれらすくなくひしく御舞など
とさきこそゆゝしかりけれ、河のほどらくらゐまでこそあるまじうて世語
つとこそいで給へ。いはゞ文いつらうろしくゆゝしあまた御子
そこもかし居すくてこそ、あるからはこれはまつ物し給
なばゝ人もくあふて、さまくしきとゆゝしきあんな給
そぞさきそ御ありけり。このゆへめでたき、これあんりしの宮
よ給ふんど、めしあ御くさうつの世まへ、ことなと
いとよりの見てさ、後くよをあかをありなま人
ありこゝろなくもかけ給ふめかり。文を納しけ

水雄
續日本紀云宝亀三年
十二月辛未山背水尾
同延暦四年九月庚子
行幸水雄岡遊猟
夫木集云水尾山城
とある今愛宕山西
麓水尾村有
夫木　よミ人
あつまゝつの尾山
の嵐ふ岩まに
まきつおとしそ　すく
○水尾山寺水雄陵
あとハ三代実録又
とくう

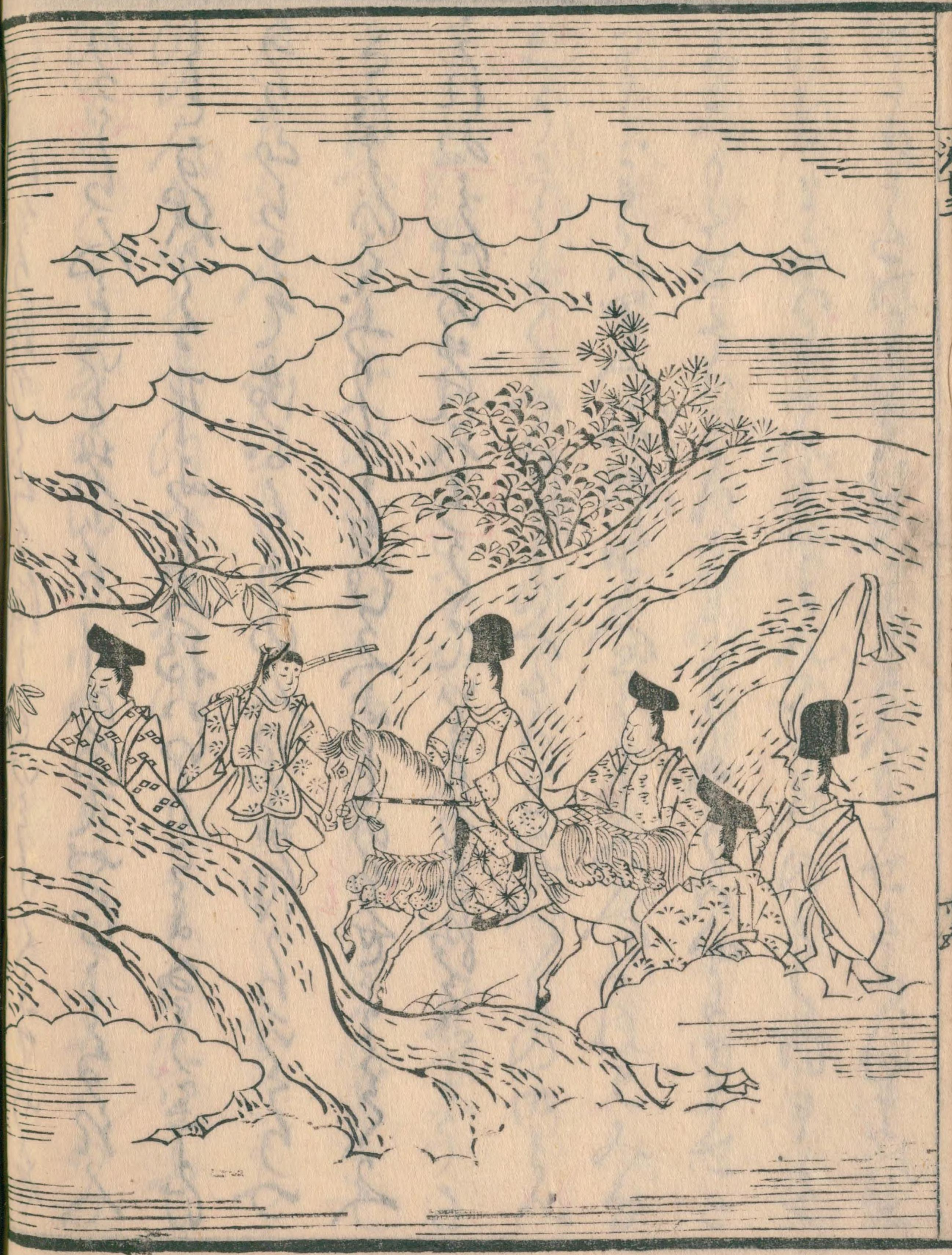
つらさへくぬ人あかりとて、ゆかくのあくせ給へ
いとめやすくさうぞきて、のぼり給へりかうらもい
もおかしれくしうきよげなり。文はことにめでたくひて
おもせ給ふ。いとをかしくて、ひさはまくよりもらくく
こくれりしき人え待ともかりそ、おもたれみせふ
大殿うめての給ふ、あまれおもはるありかへなそるこ
やあらあせかうゆうかれて待ちてかゝらうへのなう
物をとゞこめれは、大殿よりゝ見とありしうこく
かありて、ともとの給ぬ、文をかりしきりふくあとら
しかりをみしらめ給ふおとなのちくさうして
まうり給くぞひかりくものまをしてゆうりは

これらよりてなり。大殿は上一とし。文はみといれ
給はも。かのとくりの給はらしろめとなれとなん給
らさらむ所は。いそふ給ふはとあはてなくてあり
人はまゐれはさらしくなむしくつろきなそしてりく
てりのき給ふもの給は。さくさやまは殿はとてそくゆうれ
さかん。ことさら給扇くふたとくいそ給。拙とふ
くそれり上中らつる給。山こともりはさせ給ふ人こ給
ときくみそはつあとりけれ新川一つけりさせ給ほそ
をといふりさせまつり。ほともよは清せん人。人は上ま
そひた人は第二人を同為二人なる二人唐んと
かれつきわかきおらんもはしん人は人くしくさとく人をら
そくたろさなろくれをさしぬそさ。お様家らをさしてらく
をつとれをそつそてあろさはやれくらとさ。ほ様もまはは
とりの人くりらくちぬくは殿く此かろあをかんく
まさこうら。中納言はあいられをりりのくお様また色
のさしぬなあやらしなかありとりつむまは第二
人はとしまうり。山ありといふとしめくこまつり。大舞人あ
給ひあてそれ定はされ出家しいろれあるまし。もまれ
ひは人をいあてもくうくそてりとも。は第は人をさいふさ
まも。あく為さり。はとも色れ人されあらくれあての下らう
なりもそれ中納はまいろしおあそしろのさしぬなそくそ
いろのあやれくらさきさんの日とうくのことくむいりと

下し
一本直ゟ次の巻
のはしまりの八年
[illegible]

せうらうこれかみこむのきさきんかうせさう。むまなと
けちうかまさいはこらん。まゐらんの日みのさく月まさと
あまえりをせさうらこれか生さらし給ふくいんはまゆまうせさ
まうしまうい宮人法師宮人なりしたへ人らこれをみる
えさうさうそくみるとくのへさうらこれかくの限とも
（容　懐束）
よそくれ物のらをせかきつきかりしつとひて、さやうさ
うし給へしとて、人のうすをくるくゑくろとて、う生きし
くさんきりんとおひてさうしとかやむことなきさまあ
ひの人そうくさ川みそきせ川よりこなたいはまへまう
ひさくうくて二条の院りみ川まうてぞこゑくある
しみうしそ。ぞしも給はゝ、おほみの御かうらせりこさ
夜かりの物かり給ひ、くら夜ともいましくまかりつまる
みうぶら人をいとおそろしけれて、やむことなき人
くるとまを給ふるか中みをとおほいとこたまなくこまけ
あり、山ちまて清おらくりの人いとお清ういてまうつ
きなかるひくふりしまうむまの人みをとのかせぬまくらく
これぬこ川の出花みちうくていえうつき給く

は
30
17



国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17

ガラス使用

は
合 15 特別
17

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17

ガラス使用

帝國圖書館藏

国立国会図書館　タイトル『宇津保物語 30巻』 請求記号 は-17

ガラス使用